
三丁目のペペ

orzさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三丁目のペペ

【Nコード】

N6337C

【作者名】

orzさん

【あらすじ】

三丁目に暮らすペペが今日も妄想に励む。

第一話

三丁目

そこは……

悲しき町

心の闇は

いつもこの町に

繋がっている

迷い込んだ男は

獣の姿で第二人生を送る羽目に……

三丁目の住人になった

一人の男のお話

主な登場人物

ペペ

『この物語の主人公』

猫太

『心優しく頼りになる猫
実は着けみみ
ぺぺに憧れてる』

野良えもん

『未来からやって来た猫式ロボット
二次元ポケットから二次元要素のある
…いや簡単に言うと都合のいい道具が出てくる。』

アル

『自称ぺぺの弟』

豆シバ

『犬の豆芝

元の世界でも犬だった。

今は三丁目の平和を守る御巡りさん（イヌの）。』

ロリロリ

『三丁目に暮らす
単なるロリコン

ぺぺの数少ない友達の人』

三丁目の

ぺぺと言えば、こんな感じさー！

きも オタ

ペペ「なッ…なんてことだ……
もし、クレイモアが学園物でも萌る…」

ペペ猫は現実に縛られる事はない
何故なら彼は、いつでも妄想一つで
ありとあらゆるモノから
逃れる事ができるから!!

これを 『脳内妄想逃避システム』
と言うことにした。

なんじゃそりゃ…
しかも今、決めたんかいッ!!
いや、それってただの現実逃避じゃ (汗)

ペペ「と言うことは… (妄想中)」

カツッ カツッ カツッ…

教室に向かって来る
異質な妖気が一つ…

ガラガラ…

教室の扉を開ける教師

だが、一人だけ

鐘が鳴ったにも関わらず

教卓に腰掛け足を組む

一人の生徒が

「テレサ

その首が飛ぶ前に
席に着くんだ」

教師の言葉に

人をくつたような笑顔で

テレサが返答した

「イヤだと言っただら？」

「無論斬る」

そう言うと同時に

教室の入れ口の四方八方が

見えない何かに引き裂かれてく

「ふん…

高速剣か…」

「！！！」

教卓に腰掛けてた
テレサが一瞬にして
イレエネの前に立ち

無数に辺りを切り裂いてた大剣を
大剣で受けて止めた

「どうした？

先生が生徒に止められてちゃ だめだろ」

妄想終了……

ペペ「イレエネさんが、先生はいいニヤリね」

アンタ… 本編戻って

小説らしいことしてくださいよ（困り）

きも オタ

さつきから

らき スタぱく書いてね？
なにこの文章の区切り方…

今日も三丁目は平和

三丁目の住人たちは

そのせいで、平和ボケ

でも猫神家のペペは違っていた…

猫太「せんぱい」

ペペ「何を喜んでんだ漏まえは？
その紙袋はなんだ？」

猫太「見てください先輩！！
今日新聞のセールスが家に来て
あまりの押しに
断れなくて契約しちゃいました…

でも！！　こんなに色々沢山
もらっちゃったんですよ」

そう言つと

猫太がペペに紙袋を手渡す。

ペペ「ジップロックにサランラップ
トリートメントの詰め合わせに
ウェットティッシュ
トイレの消臭剤……凄ッ（汗）」

猫太「20周年だそうですね」

ペペ「そうニヤリか…」

ぜ……ゼツ……

ペペ「絶望したッ!!」

押し売り社会に絶望したッ!!」

アンタ大概にしろ!!

パクリネタするにも程がある……

猫太「先輩? (汗)」

ペペ「押し売り程

うざッたらしいーもんはない!!」

もし、ラーメン屋のオヤジが……

親切の押し売りをしたら……

私、にんにくラーメンチャーシュー抜き

某アニメのA波のセリフじゃ (汗)

へい、御待ち!!

ねーちゃん綺麗さかい

チャーシューお一つ

おまけしときやしたから!!

ってオヤジ

親指スープに入ってるー

しかも、チャーシュー抜きって言ったじゃん…… (汗)

まだあるぞ…

過去の栄光を今だに

押し売りする芸能人とか

鳥よ 鳥よ

それとか

バナナの押し売りとか!!

いや、アンタ

それ叩き売りだと思っ私… (汗)

ペペ「押し売りと言えば

もっと、わかり易い

身近な物語があるじゃないか!!」

猫太「いや、今の先輩が

要らない話しの押し売りじゃ… (汗)」

ペペ「例えば…

マッチ売りの少女とか

あれは、間切れもなくマツチの押し売り！！

マツチを擦ると幻覚を見ると言う…

マツチニヤリよ！！

危ないニヤリよー！！

危険ニヤリよー！！

幻覚ニヤリよー！！！！！！（叫び）

大麻並み！！

マジックマツシールド並み！！

ミラクルフルーツ並み！！

それは違うな

その実を食べてからレモンを
食べると甘くなるヤツだろう…

んで、牛丼はもっぱら並盛

かんけねえー（汗）

そんなもん無理やり売りつける少女……」

猫太「いや、と言う経路でそんな

大胆な勘違いができるんですか？（汗）」

ペペ「他にも！！

桃から産まれた。。太郎が

キビ団子の押し売り

亀を助けた。太郎は

竜宮城で玉手箱を押し売りされ

芸人。たるうは

石原裕次郎の押し売り

世界はこんなにも

押し売りで溢れてるのだ!!」

猫太「で、先輩は何が言いたいの？」

ペペ「セールスってな

長時間玄関前に居座り

言葉巧みに、相手を信じ込ませ

泣き落とし、粗品、親切

多種多様な戦術で契約させるんだよ……

で、漏まえ

その手口に落とされたってわけ!!」

猫太「でも…（汗）」

ペペ「な、猫太

思い出すんだあのアニメを!!」

おいしー話しの後には

ドーーーーーッ！！

ペペ「。うせえるすまん……」

そこだけ隠す意味がわからん（汗）

猫太「懐かしいですね」

ペペ「あのようには
逝かないが、何かしら付けが
回って来るのさ……」

そう、漏れたたちにも
付けが回ってきたぞ！……」

猫太「はい？（汗）
契約とつたくらいで
一体なんの付けが？」

ペペ「落ちなし……」

猫太「酷い付けですね……（汗）

って僕のせいにしないでください！……」

つづく

第二話

三丁目には

男にも関わらず

獣の姿に成らなかった

1人の住人がいる

彼の名は お下劣

オゲレッツ

【オゲレッツ大百科】

オゲレッツ

「殺助！！

いい加減に起きろ」

布団にくるまって

寝ているのが

オゲレッツが発明した

人型侍ロボット

名は殺助

ロボットにも関わらず朝に弱い

殺助

「あと……五分……」

殺助がそう言つと

オゲレッツ

「……。」

オゲレッツは部屋を出て行く

ガッ…ガリガリ…

金属バットを片手で引き摺りながら
オゲレッツが部屋に戻つて来た

殺助

「むにゃむにゃ…」

「侍ロボット……」

僕の殺気も感知出来ないのに
何が侍ロボットだ…

この……

失敗作があー!!」

オゲレツが寝ている殺助
の顔面目掛けて

バットを振り下ろす!

殺助

「ハッ!!」

綴じてた瞼を見開き

殺助は自分に向かって降りかかる

金属バットを両手で挟み

受け止め様とするが…

ガコンッ!!

金属と金属がぶつかる音が
部屋に響く

バットが殺助の顔面に
ぶつかって止まった。

殺助

「オゲレツ……

もう少し

優しく起こせないナリか…（汗）」

オゲレツ

「起こす!？」

いや、起こす

つもりじゃなかったよ…

そのまま、永眠させるつもりだった!！」

殺助

「それで

物凄い殺気だったナリか…」

【オゲレツ大百科】

オゲレツの住む三丁目には

獣の姿になった住人たちが通う学校と
迷い込んだ女の住人たちの
通う学校の二つが存在する

オゲレツは三丁目では

異例の人物なので

人間の女が通う

学校に通っている

そして、今日もいつもの様に
学校への通学路を走っている。

オゲレツ

「クソッ…」

殺助のせいで今日も朝っぱらから
ダッシュで通学とは……

ハア ハアッ……」

殺助

「もう息切れナリか？

オゲレツは体力ないナリね……」

何故かオゲレツの後ろを
走ってついて来る殺助

オゲレツ

「お前……」

オゲレツが足を止めた

殺助

「オゲレツ？

早くするナリ！！

遅刻したら

また先生に怒鳴られるナリよ」

チリン チリン♪

自転車に乗った

野球少年がベルを鳴らす

チャリのカゴにはバットとグローブを乗せ

野球少年のチャリは

2人を軽やかに抜かして行く

その瞬間

オゲレツが片手でバットを
チャリのカゴから抜き取る

自転車に乗った野球少年は
それに気がつく事なく
走り去っていった。

殺助

「なんか嫌な気がするナリが…（汗）」

オゲレツ

「お前が遅刻の原拠だぁッ!!」

殺気だったオゲレツが

バットを殺助の顔面目掛けて
振り下ろす!!

殺助

「ま、またッ!!」

殺助が降りかかるバットを
両手で挟んで受け止め様と試みる…

ガコンッ

【オゲレツ大百科】

昼休みオゲレツは

高校の屋上で

三丁目の町並みを眺めながら
クリームパンをかじっていた

その瞳は寂しげで

視線の先はここじゃなく
どこか遠くの場所を見ている
そんな目をしていた。

殺助

「オゲレツ」

そんなパン一個じゃ

貧しいガラガラな体が

更に貧しいくガラガラになるナリよ!!

牛乳も飲んで

そして野菜も食べるナリ

我が輩が買って来たナリよ」

オゲレッツの体を気遣ってか

殺助は買い出しに行って来た

そして野菜と牛乳を

買い物袋から出し

オゲレッツに渡す。

オゲレッツ

「なんでお前は……

いつも、いつも僕の独りきりの時間を
邪魔するんだよ……………」

殺助

「独りきりで居てオゲレッツの身に

何かあってからじゃ遅いナリ

我が輩オゲレッツに嫌がられても

無視されても

オゲレッツを守るのが使命ナリよ!!」

コロコロコロ…

何処からともなく

金属バットが転がって来て

オゲレツの足元に当たって止まる

オゲレツ

「いつも…いつも……」

オゲレツが屈んでバットを握る

殺助

「なんでバットが…（汗）」

オゲレツ

「この…」

ポンコツロボットがあッ！「！」

バットを上から振り下ろし

殺助の顔面を狙う

殺助

「はぁッ！！」

その瞬間殺助が

両手でバットを

挟んでバットの軌道を止めようとする。

オゲレツ

「甘い!!」

バットの軌道を一瞬止める

殺助

「なにッ!!」

寸止め…

そう殺助が気付いた時には
既に両手を合わせていた
バットは合わせた両手の横を掠め
殺助の頭に一撃を入れた。

ガコンッ

殺助

「ちよつと頭にヒビが…」

オゲレッ

「バンソーコーでも貼つてろ」

殺助

「イヤ、我が輩そんなんじゃ
直んないナリよ…(汗)」

【オゲレッツ大百科】

みほ

「オゲレッツくん！」

オゲレッツ

「みほちゃん（／／／）」

みほ

「良かったら…」

一緒に…えっと…

その…（／／／）」

もじもじしながら
喋っているのが

オゲレッツが憧れている
一つ学年が上の先輩で名は

『野々村 美歩』

オゲレッツがオカルト研究部に
入部したのもみほ先輩が部員に
居たからである。

みほ

「今日…」

いっしょに……」

オゲレッツ

「帰ろう!!」

一緒に…（／／／）」

みほ

「う、うん!!」

私もそう言いたかったんだよ…（／／／）」

オゲレッツ

「そうだったんだ（／／／）」

2人は顔を赤く染め
恥ずかしさから俯く。

オゲレッツ

「じゃ、帰ろう…」

みほ

「うん…（／／／）」

嬉しそうな顔で

オゲレッツに近づくみほ

だが、みほの後ろから
重みのある低い声がした

「それ以上オゲレッツに近づくと…」

背中を生暖かい風が
抜けていく

みほは振り向かないでいても
背中に鋭い視線が突き刺さるのが
感じとれた

みほは恐ろしさで鳥肌が立つ

「その無駄に漢を誘うような
華奢な身なりを
血で飾ってやろうか…」

みほの背後を取った何者かが
刀の柄先をみほの腰に当て
脅し掛ける

みほ

「その声は殺ちゃん！？（汗）
私、オゲレツくんと
一緒に帰るだけだよ……（泣）」

殺助

「問答無用！！」

殺助が柄に手を添える

殺助

「オゲレツの為ナリ…」

みほ

「止めて…（泣）」

こ・ろ・す・け・ッ！！

殺助の背後からとてつもなく
大きな殺意の塊が近寄って来る。

みほ

「オゲレツくん！！（泣）」

殺助

「はッ！！

この気配は……（汗）」

恐る恐る後ろを振り向く殺助

オゲレツ

「みほちゃんに

何してるんだ殺助？（笑顔）」

殺助

「オゲレツ…

な、なんで笑ってるナリか…（汗）」

殺助に笑顔で訪ねるオゲレツ
だが、それとは裏腹に
体中から溢れている

殺意の混じったオーラ
そのせいか

周りの空気が重く息苦しい

殺助は、そのオゲレツの姿に
己の死を悟った…

オゲレツ

「ほら、黙ってないで

答えてよ殺助♪（笑顔）」

殺助

「……あの、その、

わ、我が輩……えっと…（汗）」

みほ

「オゲレツく〜ん（叫び）

これで助けてッ！！」

みほが制服のスカートの中から

バットを取り出し

オゲレツに向かってバットを投げる！！

殺助

「何処から出してるナリッ！！（汗）
ツてか、何渡してるナリか」（泣）
この雌狐ッ！！（怒）」

回転しながら飛んでくるバット
オゲレッツは片手を上げると
バットは吸い付く様に上げた
手の中に落ち
グリップ部分をキャッチした。

オゲレッツ

「殺助……
誰が雌狐だって？」

殺助

「オゲレッツま、待つナリよぉ」（泣）
我が輩はオゲレッツが
この雌狐に唆され
弄ばれて骨の芯までむしゃぶられて
拳げ句の果てに捨てられるのが
目に見えるから……

オゲレッツの為ナリよ！！（真剣）」

オゲレッツ

「……………」

2人の間を風が吹き抜け
枯れ葉たちが転がる

次の瞬間

2人の沈黙が破れた

オゲレッツの
分厚いレンズの奥に隠れた
眼孔が鋭く光る

殺助

「来るッ！！」

次の瞬間

殺助が左腰に掛けた
刀の柄を握り
鞘から抜き出し
右上に切り上げた

殺助の目の前に

オゲレツの姿は無く

殺助が刀を

抜き終えたのと同時に

オゲレツの一太刀も終えた後
だったのか…

殺助の後ろには

背中を向け立っている

オゲレツの姿があつた

殺助

「甘かったナリね…」

オゲレツのサンバイザーが地面に落ちる

肩より少し長めの

後ろで結んでいた

一本の三つ編みが解け

オゲレツの髪が風になびく

みほ

「オゲレツくん…

かわいい（／／／）」

オゲレッツ

「……」

突然殺助が倒れ込む

殺助

「そ…そんな……」

バタンツ

オゲレッツに走り寄るみほ

みほ

「はい♪サンバイザー」

オゲレッツ

「ありがとう（／／／）」

みほ

「良かったら…」

私のゴム使って髪直して（／／／）」

オゲレッツ

「うん…（／／／）」

殺助の心配を余所に
オゲレツとみほの
距離は縮んだのだった。

殺助

「無念ナリ……」

つづく

ペ
ペ

「あれ？漏れの出番は？？」
「」

第三話

もし……

ぺぺと猫太が

だるまさん転んだをしたら!!

ぺぺ

「だるまさんがー転んだ!!」

後ろ姿のぺぺが振り返る

だが、猫太はぴたりとも動かない

ぺぺ

「動かないニヤリね……」

ぺぺ

「だるまさんがー」
転んだッ!!」

後ろ姿のぺぺが振り返る

だが、猫太はぴたりとも
ぴくりとも動かない！！

猫太

「
…」

ぺ
ぺ

「やるな……」

クソッ
……

後、少なくとも

大股七歩半つてどこか

猫太の脚の早さなら……

次あたりが勝負の別れ目になる

よしッ！！

ここはあの手で勝負を
仕掛けるとするか…

ぺ
ぺ

「猫太さんがあー」

孕んだぁッ！！！！」

後ろ姿のぺぺが振り返るが！！

猫太

「孕む訳ないでしょが!!」

ぺぺ

「フグハツ!!」

振り返ったぺぺの目の前に

猫太が屈んで右の拳に力を込め

そこから猫太が

体全体をバネの様に使い飛び上がる

次の瞬間ぺぺの顎に

アッパーが撃ち込まれ

そのまま跳ね上がるぺぺの体

そしてぺぺは

空の彼方に消えていった

ぺぺ

「ハヒフヘホ」

キラッ

そりゃ、某アニメのB菌マンのセリフじゃ…（汗）

猫太

「あッ…」

力入れすぎたかも（汗）

いや、それもあるが…

今の確実にペペに動いたとこ見られてたよ！！

【三丁目】

今日我が家にみほ殿が遊びに来た

我が輩、殺助はオゲレッツに
部屋から追い出され…

今オゲレッツの部屋の前で二人の会話を
盗聴している最中だ！！

もし、あの雌狐が変な気起こして
オゲレッツに何かしたら
この刀の錆にしてやるナリ…

んッ？ 中から何やら怪しい会話が……

「オゲレッツくんじっとしてて」

「みほちゃん…」

恥ずかしいよ……」

「結構溜まってるね!？」

「あんまし…」

ジロジロ見ないで…」

「オゲレツくんったら、可愛い(ハート)」

何たる事を……あの雌狐…

オゲレツを裸にしてるのでは………

「オゲレツくん痛くない？」

「う、うん…」

「おつきい…(ハート)」

「あッ…(／／／)」

ガーーーーンッ!!

一つドアの向こうで…

今オゲレツが大人の階段
上ってる最中ナリか(泣)

あの……………雌狐目ッ

殺すッ！！

ドカツ

殺助が勢い良く部屋のドアを蹴り飛ばした！！

殺助

「オゲレ…………えっ（汗）」

だが、殺助の目に飛び込んだのは

服が開けたみほとオゲレツが
重なり合って、ではなく！！

みほの膝枕の上で

オゲレツは気持ちよさそうに
耳搔きをしてもらってた

そんな仲睦まじい光景だったのだ。

殺助

「…………」

オゲレツ

「殺助……」

オゲレツの祝福な時間をぶち壊しにし
その挙げ句、部屋のドアまで
壊してしまった殺助

オゲレツがみほの膝枕から頭を上げ
寝そべってた体を起こす

オゲレツ

「殺助……」

殺助

「オゲレツ落ち着くナリよ（汗）」

殺意剥き出しの眼光

体を覆う黒い殺気の塊

みほ

「はい、オゲレツくんこれ」

みほがオゲレツにバットを渡す

殺助

「って何渡してんだ!!
この雌狐ー（叫び）」

オゲレツ

「死ねッ!!」

殺助

「ギャアアアアア」

【三丁目】

肩を落としながら
とぼとぼ歩く殺助

「オゲレツは我が輩に
全然優しくないナリ…

それどころか……ううゝ

あの雌狐の方が大事ナリゝ（泣）」

殺助はその場で
脚を組み正座し

着流しの上を開けて見せると
そんな格好してたのかよ…

ロボットとは思えない様な
しっかりした胸板を覗かせ

殺助が刀を抜き

切腹しようと刀を逆手で持ち

もう片方の手を合わせ

しっかり握りしめ

構えた刀の先を腹に当てた

殺助

「オゲレツのバカ……（泣き）」

何もそこまで…

その時、殺助の頭上真上から
落ちてくる白い塊……

いや、あれは猫神さん家のぺぺだ!!

ぺ
ぺ

「氏ぬうー……（叫び）」

殺助

「オゲレツに必要とされない
我が輩なんか……」

さよなら……

……オゲレツ」

覚悟を決め刀を己の腹目掛け
突き刺そうとした

その瞬間！！

殺助の頭上にペペが

ガッコーーーーーンッ

落ちた……

一瞬の出来事で
何が起ったのか理解出来ない殺助

それより何より
頭蓋骨にヒビが逝った様な…

殺助はロボットです
間違っても頭蓋骨はありません！！

脳みそが揺れ動いた様な…

殺助はロボットです
間違っても脳みそありません

ペペ

「イッテッ」

起き上がるペペ

ペペ

「猫太の奴…

思いつき殴りやがって…

すみません…大丈夫で…んっ！？」

ペペの足元

に殺助の首が転がって来た

それに気が付いたペペ

辺りを見渡すと

地面に刺さった刀と

首の無い上半身むき出しの体が
地面に倒れてる。

ペペ

「ギャアアー（叫び）

首ニヤリよ」（泣）

しかも上半身裸ニヤリよ！！

どうしよう……

てか、この状況を誰かに
見られたら……

マズいだろ……………」

落ち着け、落ち着くんだ漏れ！！

先ずは、警察に電話して…
こうなった理由を説明する

猫太に殴られて
漏れはここまで飛ばされ
地面に落下したら

そこに、たまたま

この人が居て
ぶつかった……

あれ（汗）

漏れのせい！？

ガーーーーーッ……！

ペペ

「そんな……」

「ペペ何してるワッ？」

後ろから聞き覚えのある声がする

振り返るペペ

ペペ

「マメ……」

豆シバ

「ハッ……」

“三丁目の住人講座”

『豆シバは三丁目の犬のお巡りさん
みんなの生活を守っているんだよ』

ペペ

「マメ聞いてくれ!!」

これには深い理由があるニヤリ!! (汗)

豆シバ

「ペペ…」

ついにやらかしたワンね… (泣)

ペペ

「そうだけど違うニヤリ!! (汗)」

豆シバ

「逮捕するワンッ!!」

殺助

「何だか…」

うるさいな…んッ!?

目を覚ます殺助

ペペ

「本当に漏れはやってないニヤリ」(泣)

豆シバ

「言い訳したってダメワン!!
その刀で首ちょんぱにしたのは
わかってるワンよ!!」

ペペ

「ちよつ待て!!」

そんな勝手な推理で

漏れの罪を重くするな!! (怒)

殺助

「あの」

ペペと豆シバ言い争う横から
誰かの声がした

声のする方を向く二匹

ペペ

「なッ!!」

豆シバ

「にッ!!」

殺助

「すまないナリが
我が輩を体に
くっつけてくれないナリか!!」

ペペ

「生首が……（汗）」

豆シバ

「しゃ、しゃべったワン……（汗）」

ギヤアアアアア

あまりの恐ろしさに
二匹が叫びながら
その場から逃げる

殺助

「落ち着くナリ」（汗）」

落ち着けるか!!

置き去りにされる殺助

殺助

「オゲレツ……」

我が輩

このまま終わりを迎えるナリかね…

もう、オゲレツを守る事も

出来ないナリか…

バットで殴られる事も…

せめて最後に雌狐を斬ってから

逝きたかったナリ………

でもオゲレツ…

我が輩感謝してるナリ

我が輩を作ってくれたお陰で

色々な事学んだナリ

それに毎日

オゲレツと一緒に楽しかったナリ………

ありがとう………

……… オゲレツ…

「おいッ！！」

んッ！？

なんナリ人がせっかく
瞼を閉じて

覚悟を決めてたのに！！

そんな文句を

思いながらも瞼を開く殺助

殺助

「オ、オゲレッ………」

オゲレッ

「大丈夫か！？」

殺助の頭を持ち上げ
殺助の体にはめ込む

キュウーーーーーン

ガシャンッ！！

殺助

「体が動いたナリ」
でも、なんでオゲレツが居るナリ？」

オゲレツ

「お前が壊れたら
メガネのモニターに
警告画面が出るんだよ!!」

殺助

「そうだったナリか…」

オゲレツ

「ほら、ちゃんと着ろよ…
全く……」

殺助は言われた通り
着付けを直す

オゲレツ

「帰るよ…」

殺助

「御意!!」

オゲレツの言葉に殺助は
嬉しそうな顔で答えたのだった。

つづく

その頃、猫神さん家では

猫太

「せんぱい（汗）」

ペペ

「うあゝん（泣）」

生首が喋ったニヤリよゝー！！

おっかないニヤリよ猫太ゝ（泣）」

猫太

「そ、そうなんですか？

大丈夫ですよゝ（よしよし）」

マズいな…

あの時、力入れすぎたから

先輩殴られた衝撃で

頭おかしくなっただんじゃ…

第四話

三丁目で2人は…

出会ってしまった……

801道を極めようとする若者と
BL道を極めようとする猫が

出会ってしまった……

2人の出会いは

本屋のBL本をお互いに
手に取ったのが始まりだった。

ペペ「むッ……

おなご…この本は漏れが先に手に取った!!」

女「いえ、私の方が先でした!!（キツパリ）」

ペペ「むッ…

悪いが今月号は買わない訳にはいかないニヤリ
巻頭カラーの男が受けか攻めか
ようやくわかるニヤリからね!!

譲れないニヤリよ（怒）」

女「私もそれが狙いです！！
その手を放して下さい！！（キッパリ）」

ペペ「ううゝ（汗）」

なんてこの町は残酷なんだろう。
本自体がマイナー路線だからか
発行部数が少なく
どの店でも在庫が少なくてすぐ完売
この店でようやく見つけた一冊

しかし、その一冊が見知らぬ他人と
奪い争う理由になるなんて。

そうならない為に
予約とか取り寄せとかあるんじゃない？（汗）

女「てかアナタ…
ホモですか？」

ペペ「ホモでもゲイでもない！！
漏れはBL道を極めようとする者だ！！」

女「なんです そのBL道って？」

ペペ「BL道とは簡単に言うと腐男子のことさ
美少年と美少年の絡みを研究し
BLを司る道なんだーーーー（叫び）」

女「要するにホモなんですねぇ（ハート）」

ペペ「ちがッ!!」

漏れはホモじゃない（怒）」

女「んー（疑いの目）」

じゃーなんでこの本を？」

ペペ「趣味……だからかな（汗）
えーいッ うツさいわ!!」

そりゃーこの様な本読みますけど

美少年も好きな腐男子ですけど

けしてホモじゃねー!!」

女「苦しくなってきましたね（ハート）」

ペペ「全然苦しくなっていないッ!!」（怒）
てか手を放せ…

漏れは譲らないからな……」

女「私だつて…」

高だかB L本で
硬直状態が続く…

ペペ「ところで…」

女「なに？」

ペペ「今日でこの男が
受けか攻めかわかるのだが…
おなごはどっちだと思うニヤリ？」

女「そうですね…（考）

周りの子たちが言うには
ネットの掲示板と変わらない意見で
攻めなんですよね」

でも「私は受けだと思っんですよね」
そう思いませんホモ猫さん？」

ペペ「なッ……（ホモじゃねー）

まあ…なんでもいいや……

漏れもそう思うよ！！

あの先生の作品は
攻め重視とした濃い作品で
受けなんてただ美少年なら
なんでもいいか見たいな

ただ寝せて声出させとけばいいか見たいな
主人公以外は風景とかわからない見たいな

だが今回は違う、受けなのか攻めなのか

刑事ものなら容疑者が黒か白か

くらい重要なことだ…

それを、ここまで引つ張ってきた

それなりに先生も受けを勉強してきたってことなのさ
だから今回は受けをメインとした初作品になるのだ!!」

女「そうですね」

先生の作品ってベツトシーンに入ると

攻めの方の絵が

井。先生（バカボ　ドとかでお馴染み）

を思わせる感じのしつかりした絵に対して

受けはもっぱら

富。先生（HUNTER　HUNTER）を思わせるような…
まあ、わかりやすく例えましたが…

斬新な手抜きですかね？」

ペペ「自分の性的な絵の濃さを補う為の

モザイク見たいなもんだろう!!」

受けまで濃かったら

焼きそばの上に半熟目玉焼き

その上にソース見たいになっちまうよ!!」

女「濃いですね…

濃い上に濃い物を……クドいです（汗）」

ペペ「第一受けと攻めって

腐男子や腐女子の基礎見たいなもんじゃん
そう腐の土台なんだよ!!」

そう、2人並んで歩く美少年を見て

どちらが受けか攻めか考え始めたら初期症状

この道を進む者なら一度は考えたことがあるはずだ!!」

女「ホモの道ですね!!」

ホモ猫さん（尊敬の眼差し）」

ペペ「と言うこともあつて

腐の初心者も食いつきやすい

内容で売れ出したニヤリよね」

女「ね」

て同じ本を掴み合つて何がねえ」だよ（呆）

ペペ「てか……

どうしたら譲ってくれるんだおな」……」

女「そうですね」　んー（考え中）

じゃー私はホモですって

大声で認めてくれたら譲りますよ（ハート）」

ペペ「え？

なに……んなこと出来るか!!」（汗）」

女「え」（ガツカリ）」

じゃ、譲りません!!」

ペペ「な……」

くそッ どうする漏れ…

このまま相手が折れるのを待つか

いや、このおなご心が強そうだ…

折れそうにない(汗)

どうする…

女「どうします？

ホモ猫さん(ハート)」

ペペ「んー(汗)」

ちょっと待て

プラスに考えろ!!

高が八文字を

叫ぶだけで本が買える…

いや、普通ならそんなこと

言わなくても本が買える……

なんで漏れの道は険しんだろうか

歩こうっ歩こうっ

私は元気っ

歩くの大好き どんどん行こう

坂道 トンネル 草ツ原
一本橋に

でこぼこ砂利道↑いまここかッ!!

そうかこれは試練だ!!

今が一番キツイ

でこぼこ砂利道だもんな…

そりゃーキツイ訳だ

ん……

残りの人生にくもの巣と下り道が……

あああああゝ（泣）

私は空元気じゃんこれじゃ……

て今は泣いてる場合じゃねー

よし…

ペペー一回しか言わないからな…

耳の穴かっぽじつとけ!!」

女「はい♪」

深呼吸をして

自分を落ち着かせる

そしてペペが口にした

ペペ「漏れは!!」

ホモじゃねー—————
うわぁ〜（泣）」

B L本からペペの手が離れる

女「あ!!」

ホモ猫さぁ————ん!!」

ペペの背中が小さくなっていく
自分の欲しかったものを
手に入れた女の顔に
笑顔はなかった。

女「ホモ猫さん…
自分を偽らないで

その気持ちは…
間違いとかじゃないから………」

勝手な思い込みが
女を切なくさせるのだった。

う
う
う
う

第五話

私の名は、影猫。

この町に来ても私は影が薄い…

生まれつき影が薄い私

子供の頃、かくれんぼをした。

誰も私を探しに来てはくれなかった…

部活はサッカー部だったけど

私にボールが回る事はなかった…

人の輪には入れても

存在自体を何故か忘れられてしまう…

私は存在してるのに、誰一人も私が見えていない

存在してないのだ…

この町で私は生まれ変わるはずだった…

だけど、人間そう簡単には変わらない…

ペペ「ん〜」

ロリロリ「ペペどうしたロリ？」

ペペ「いや、気のせいだとは思って…

誰かの視線を感じる（汗）

しかも、如何わしい目つきで

それこそ袋とじを、切らずに

隙間から見ようと目つきで

それこそアイドル写真集とかで

スカートの絶対領域を

斜めにして覗こうと試みる目つきで

誰かが漏れをそんな目でみてる……（恥）「

ロリロリ「いや、どっちかと言うと

蔑んだ目で見てると思うロリ。」

ペペ「どっちにしても、見られてとなると

ドキドキして毛穴開いちゃうよ…（照）「

ロリロリ「油汚れで毛穴開いてるロリよ多分…

てかドキドキする度に毛穴開いてたら

顔穴だらけロリ。」

ペペ「でも確かに誰かの視線が…」

影猫「あの二人とも…

私のこと忘れないで……」

ペペ「あっ!!」

いつから居たニヤリか? (汗)」

ロリロリ「スッカリ忘れてたロリ(反省)」

影猫「いや…お祭り行こうって

誘ってくれたのはそっちなのに…」

ペペ「ああゝ漏れたち

お祭り行く途中だったんだゝ思い出したx2」

ロリロリ「メインを忘れちゃダメロリよ!! (困)」

ペペ「それにしても

影猫さんは相変わらず影が薄いニヤリね……」

影猫「ごめん……」

ペペ「な、ロリロリ漏まえもそう思わんか?」

ロリロリ「ん?」

ペペ「どうしたロリロリ?」

ロリロリ「今気がついたロリが…

有るはずの物が無いロリよ影猫さんには……」

影猫「……」

ペペ「え？

色気、食い気、ノンケ？どれさ！！」

ロリロリ「その三つ？

残念だけどかすりもしないロリよ」

影猫「昔から無いんだよ私には……」

ロリロリ「影猫さん……」

ペペ「だから何が無いんだよ（汗）」

ロリロリ「ほら！！」

ロリロリが地面を指す。

ペペ「なんだ？」

ロリロリ「ちゃんと見るロリ……それぞれ！！」

ペペ「なに？

………えっ、マジ（汗）」

ロリロリが指差していたのは
路上に浮かぶ漏れらの影
しかしそこには……

二匹の影しかなかったのだ。

ペペ「影猫さんの影がない……（汗）」

ロリロリ「影どこかに落としたロリか？」

影猫へそう 私には影がないんだ…

そのせいかどうか知らないけど

人一倍影が薄くて

ツライ思いもした……

今はもう慣れちゃったよ。」

ロリロリ「そんなの慣れたらダメロリ！！

三丁目に来た影猫さんは

昔とあんまり変わらないかも

知れないけど…

変わろうと努力すれば変われるロリ」

なんでもかんでも

影がないせいにしちゃダメロリ！！」

ペペ「そう簡単に人間変わらんよ」

大体ロリロリ漏まえ

自分の属性を変えられるか？」

ロリロリ「それは…（汗）」

でも、それとこれとは話しが別ロリ！！」

ペペ「違わくないよ。

漏まえがロリコン止められないのと同じで

影猫もその影が薄い自分を止められないのだ。

そう、ロリコンの漏まえが

ロリコン止めますか？人生止めますか？

つてのと同じ。」

影猫「……………」

ロリロリ「そうやってなんでも決め付けて…

ロリだって、止める覚悟があれば

絶対変わるロリ」（怒）「

ペペ「はいはい。」

ロリロリ「ちゃんと話を聞けロリ（怒）」

ペペ「ムゥっとしてたら

祭りで幼女楽しめないぞ」

ロリロリ「うるさいロリ！！

全力で楽しむロリ（怒）」

影猫を忘れ

二匹は先に行く。

影猫「グスッ……………」

涙で二匹の影も歪むのだった。

う
う
く

第六話

自転車を押しながら歩く猫太

その後ろを

ノベル本を開きながら

ゆっくりペペがついて来る。

猫太

「先輩」

ペペ

「なんニヤリか？」

猫太

「それ、面白いんですか？」

ペペ

「ああ」

そこそこムラムラできるからな!!」

猫太

「最低ですね……」

ペペ

「そうか？」

猫太

「最近、図書館も行っていないな」

子供の頃って図書館もそうですけど
プールもいっぱい行ってたっけな。
先輩はどうでした？」

ペペ

「漏れか？」

家でゴロゴロしてたぞー!!」

猫太

「……」

ペペ

「そうそう、昔プールで溺れて
死に掛けたことがあったニヤリが、
お姉さんに助けて貰ったことがあるニヤリ!!」

猫太

「昔からどんくさかったんですね。」

ペペ

「まあ、そのどんくささのおかげで
パイ乙の浮力はすごいと分かったのだ、
結構プールの水が飲まさって息が出来なくて
苦しかった
もう、ダメかと思った……」

その時ぼやけた視界に

あのノーチラス号が目飛び込んだ
柔らかいノーチラス号にしがみ付きながら
漏れはその人がネモ船長だと確信した……」

猫太

「海底二万マイル……？」

ペペ

「なんだ？」

猫太

「別になんでもないですよ。」

猫太の言葉で

話しは半ば強制的に終了した。

ペペ

「なあ」

チャリの後ろのせろよ」

猫太

「いやです！！

二人乗りは罰金ですよ。」

ペペ

「なに三丁目で

かてえーこと言ってたんだよ！！」

猫太

「……」

結局ペペを後ろに乗せ
自転車をこぐ猫太。

猫太の背中に

ペペが寄りかかる

猫太

「なんでいつも後ろ向きで
乗るんですか？」

ペペ

「この方が面白いから♪」

猫太

「へー」

夕暮れ時

二匹の乗る自転車が
ゆっくり坂を下る

ペペ

「思い出すな……」

猫太

「なに？」

ペペ

「田舎のばあちゃん家…」

凄く田舎だからさ

夜の八時には店も閉まるんだ。

町なのに民家が少ないし

電灯も信号機も少なくて

夜は凄く暗くて…

おまけに近くが海だから

潮の音しか聞こえてこない……」

猫太

「……」

ペペ

「行きも帰りも峠を越えなきゃいけないくて

夜中帰る時は

怖かった……

家族と一緒になのに

世界で一人ぼっちになってしまった

様な感覚に陥る…

心が不安定で

寂しくて…なんだか悲しくて…」

猫太

「……先輩」

ペペ

「でも、最後の峠を下るカーブで
町の光りを見たら

凄く安心した……」

自転車に揺られながら二匹は

この坂の下りから見える

自分たちの住む三丁目を見ていた。

つづく

第七話

安楽カフェ

メイド屋

それが、ここの店の名

カランコロン♪

深々と被ったとんがり帽子に
黒いマントを羽織った客

三丁目に男の人間は居ないので
どうやら、女のような

黒々とした長い髪

櫛が絡まないような

サラサラストレートで

枝毛の一つも無い

そんな綺麗な髪質の女

鼻先よりちょい上に掛かる

前髪のせいで、女の目が窺えない

どうやら、今日の客らしい…

怪しい…

怪しすぎる…

そんな客がカフェの扉を開けた

「いらつしゃーいませ」

ご主人さま」

笑顔で客を向かえるメイド

夏用のメイド衣装なのか

色白で華奢な腕

ぷりっとしたスレンダーな足を

ふりふりのスカートから覗かせている

髪は白のストレートで前髪の横、耳の前辺りに

ブルーグレの綺麗なメッシュがアクセントに真っ直ぐ入れられてる

そして一番目に付くのはその瞳だった

凄く綺麗な澄み切ったブルーをしていて

見る者を引き寄せるような不思議な瞳をしている

そんな、笑顔の可愛らしメイドさんが

怪しい客を席に案内する。

「こちらにどうぞご主人さま」(笑顔)」

「……」

「お飲み物は何になさいますか？」

「……ちよつと…」

黙れえッ！！（大声）

今膨大な宇宙の意思が感じられた…」

一瞬大声で叫ぶと

また、聞き取れないくらいの小声で
意味の分からない事を言う…

「ああゝ宇宙の意思ですか…
むう……（瞼を閉じ）」

メイドさんも
瞼を閉じ感じ取ろうとする…ってバカ？

???

「オイッ！！」

カウンターの隅に
座っていた客が立ち上げり
怪しい客とメイドさんの方へと歩み寄る

この客も、人間の女らしいが…
変わった身なりをしている
保健室の先生が着るような白衣
中は白のキャミソールに
黒のスパッツ

髪は短めでボイッシュな印象を受ける

???

「なァーメイドさんよ!!」

メイドさん

「どうかなさいましたかご主人さま？」

???

「どうかなさいましたかじゃねーだろッ（怒）

アンタに頼んだオムライスが
まだ来ないんだよッ!!（怒）」

メイドさん

「ええッ!!（驚き）

す、すみませんご主人さま…
すっかり忘れてしまつて…エヘッ（笑）」

「何が、エヘッ（笑）だッ!!」

大体さつきも

ミルクティーまかしたばっかだろうがッ!!

そして次は注文したもん忘れただだ?

はあゝアンタ、アタイをバカにしてんだろ!!

向かいの吉田屋なら注文したら

三分以内に牛丼出てくんだよ!!」

全国チェーンの。野家じゃなく…

吉田屋なんですか……

メイドさん

「すみませんご主人さま…

私昔からドジでのるまで…うう…（泣き）」

????

「な、何も泣くこたねーだろ（汗）」

ドンッ!!

席に座っていた怪しい客が

両手をテーブルに叩き付けると

ゆっくりとその腰を上げる

怪しい客

「あなたは……

何しにこの店に来たのですか………」

????

「誰だアンタ？」

怪しい客

「私か……」

決まった名なのどないが……

住人たちは私をウィザードと言う……」

????

「じゃーウィザードさんよ!!」

アンタ、このメイドのやった事

笑顔で許せるって訳か？」

ウィザード

「許せるとか

そんな小さな次元の話ではない……

メイドさんの属性も楽しめない人が
来るべき場所ではない……」

????

「はぁッ？

何だとコラッ!!（怒）

ああーじゃ言わせてもらうが

属性どうのこうの言う前に

メイドの衣装で短い夏用って

邪道も良いところだろ！！

メイドはやらむやみに肌を見せつけないもんだ……
属性を楽しむ？

アంత、こんな邪道で全く為ってねー

メイドの何を楽しんでんだ！？」

メイドさん

「私の為に

ご主人さまどうし

喧嘩しないで下さいませ……（涙）」

いや、空気読もうねーメイドさん

ウィザード

「泣かせたな……」

????

「なんだ？やんのか？」

ウィザード

「場所を変えましょうか……」

????

「いいぜ……」

2人は安楽カフェ・メイド屋から外に出ると
距離を置いて、向かい合わせに立つ

メイドさん

「私の魅力が原因なんだは…」
いや、思い込みって怖い

???

「一つ言つとくが…」
アタイは三丁目では
勇者って言われてんだ!!」

ウィザード

「勇者さんでしたか…」
でも、手加減はしませんから……」

勇者

「悪いがウィザード
アタイは生まれて
この方負けなしなんだ!!」
ってもう呼び捨てかい!!

ウィザードが全身を被うマントを
開き肩の後ろに回すと

スクール水着姿のウィザードが現れた
手首から肩と足本から太ももまで
両方の腕と脚みっちり古代文字の様な
入れ墨が彫られていた

白衣にスパッツを着こなした勇者と

三角帽子にマント
そして、スクール水着を
着こなすウィザード

この上ない
三丁目の萌を司った戦いが
今、幕開けしようとしていた！！

勇者が首にしてた
ゴシック調のデザインの
剣を象ったペンダントを首から外すと

一瞬にしてネックレスが
大剣へと変わった
いや、大きく為ったと
言った方が正しいかもしれない

その手に握られた大剣を
横一線に振るう

勇者
「ハアッ！！」

するとウィザードに向かって
一瞬鋭い風が吹く長い髪がなびくと
とんがり帽子が宙に舞い地面に落ちた

メイドさん

「うわぁ〜¥（。□。）／」

勇者の一太刀でメイドさんにも被害が及んだ
あの突風でスカートが捲れたのだ

ウィザード

「……白……」

ウィザードはしっかりメイドさんの
パンティーを見ていたのだ！！

勇者はその一瞬を見逃さなかった

軽く地面を蹴り
並外れた跳躍で
高々と飛び上がった

勇者

「ほらよつとッ
ッ」

そのままウィザードの頭目掛け
体ごと大剣を振り落とす

だがウィザードは横に軽くステップし
豪快な一振りをかわす

大剣が地面を砕き割り

粉塵を撒き散らす

勇者は振り切った大剣を休ませる事なく
片腕で軽く大剣を横に振るう

ウィザードの腹部を大剣の腹で
弾き飛ばす

ズザザザザ…

砂煙を巻き上げ地面を滑るウィザード

勇者

「ん？」

だが、勇者は違和感を感じた

勇者

「今の一撃で大抵

クマくらいは死ぬはずなんだけどなー（困る）」

ウィザード

「今のでわかりましたよ…

勇者さんがバカ力って事は……

でも、それだけじゃ

私は倒せませんよ……」

ウィザードの四脚の

古代文字らしき入れ墨が

所々赤く光り

少し経つとその光りは消える

片腕を前に出し

掌を見せる様に上げる

すると掌の中心に

小さな火の弾が生み出される

勇者

「おい…（汗）

んなビー玉くらいの

大きさの火で何が出来るんだよ」

ウィザード

「えい……」

ウィザードの掌から火の弾が放たれた

勇者

「はやッ（汗）」

そう言いながらも

勇者は弾速並みのスピードで

放たれた火の弾を目で捕らえていた

神がかった

動態視力と身のこなしで

剣でその弾を弾き返す

だが、剣が火の弾に触れた瞬間
閃光が走り

ズゴンッ！！

メイドさん

「キヤーッY（＜|＞。）Y」

耳を貫く爆発音

勇者が火柱に呑み込まれた

黒煙と燃え盛る炎で勇者の姿が見えない

爆発の衝撃で勇者の手から放れた

大剣が空を切り裂きながら回転し

地面に突き立つ

メイドさん

「勇者さーん！！（涙）」

ウィザード

「口ほどにない…」

燃え盛る炎がその強さを弱め

勇者の周囲を被う黒煙が徐々に薄くなる
だが、そこに見えるはずの勇者の姿がない

メイドさん

「勇者さん」

メイドさんがウィザードの真上を指差す

勇者

「避けてみな!!」

膝を組みその身を丸め

立て回転させながらウィザードに飛んでくる
その回転から生み出す

空を斬るような鋭い踵落とし

ウィザードは×（クロス）させた腕を

頭の上で組み打撃をその中心で受ける
衝撃でウィザードの両足が

地面を碎き沈む

勇者

「チッ…」

仕留め損なつた勇者が舌打ちする

ウィザード

「私の番…」

そう小さく呟くと

腕と脚の古代文字の刻印が

一文字づつ所々強い光りを放ち消える

すると、ウィザードの体は忽ち炎で包まれ

勇者を巻き込むように炎は広がり

球体状へと姿を変へ

次の瞬間閃光を放つと同時に爆発を起こした！！

勇者

「なッ」

ズゴーンッ！！（本日二回目の）

踵の一撃を受けた状態から身動きする事なく反撃に出たのだ

反撃ってか自爆なんじゃ…（汗）

メイドさん

「イヤアーツ」

メイドさんの悲しみの声が三丁目に響く

炎の中から勇者が飛び出した
あの凄まじい爆発と豪炎の中

勇者は服も体も無傷で
火傷一つなくこの場に立っている。

豪炎の中からウィザードが出てくる
此方も炎に包まれていたにも拘わらず火傷一つない

メイドさん

「勇者さまにウィザードさま」

2人の無事を心から喜ぶメイドさん

勇者

「アタイの白衣は火には強いんだよ!!」

勝ち誇った顔で言う勇者

それを顔色一つ変えず

ウィザードが話を切り換える

ウィザード

「私には勝てませんよ…」

勇者

「ああッ？」

勇者が眉間を寄せる

ウィザード

「確かに勇者さんの身のこなしなら
普通のウィザードは齒が立たないでしょうが…
私は普通と違うんですよ…」

「「確かにその格好は普通じゃ…」」
勇者とメイドさんの声が合わさる

てか勇者には言われたくないだろ!!

ウィザード

「一般のウィザードは
魔法陣を使ったり魔術書を使ったり
または呪文を唱え魔術を発動させますが…

私は四脚に刻まれた文字を反応させ
瞬時に発動させれます…

要するに硬直時間無しに魔術を発動出来るのです……
そして何よりの強みは
複数の魔術を同時に発動出来る事……

これ以上やり合っても
傷一つ付けられませんよ私には……」

勇者

「あつそ!!
だから何だつてんだよ
アンタの四脚打った斬れば済む話だろが!!」

いやーそれは三丁目では止めてね勇者さん

メイドさんがウィザードの前に出て
両腕を広げこの状況を止めに入る

メイドさん

「ダメですッ！！そんなの絶対！！
この店に来たご主人さまに
万が一何かあつたら…

私………

シャム（メイド長）さまに怒られます（涙）
要するに自分の心配かいッ！！

地面に突き刺さった大剣を引き抜く勇者

勇者

「てかアンタが頼んだもん忘れるから
今こんな状況になつてんだろーがッ！！
じゃーアンタがウィザードの代わりに
斬られて詫びなー！！」

んな滅茶苦茶な…（汗）

ウィザード

「斬つたら尚更オムライスが出てこないのでは…」

全くその通り！！

勇者

「あ…そつか…（汗）」

メイドさん

「忘れたのもありますけど…」

私オムライス作れないんです

（ ）ゞ
「」

「「ならメニューに入れんな！！」「」」

勇者とウィザードと作者の声が合わさりました！！

メイドさん

「だって…」

オムライスはシャムさまじゃないと作れないんです（＞＜；）

それに今シャムさまは留守中だし…

困っちゃいましたね…エヘッ
「」

いや、もうツツコミ入れたくない

勇者

「じゃー頼んだ時にそう言えよ！！

本当ム力つくなアンタ…（怒）」

ウィザードが落ちてた自分の

とんがり帽子を

二、三回叩いて汚れをほろうと

また、深々と被る

そしてマントで全身を隠すように纏う

勇者

「なんだ？逃げんのかよ！！」

まだ、決着がついてないだろがッ！！」

ウィザード

「決着ならもうついたはず…」

ほら……」

勇者

「あッ！？」

この店に向かって来るメイドの姿が

そう、安楽カフェ・メイド屋の
メイド長ことシャムさまだ！！

シャム

「なんだ店の前で！？」

メイドさん

「シャムさまゝ三（ノハハ）ノ」

メイドさんがシャムの元に
全速力で向かって来る！！

メイドさんがシャムの胸に飛び込む
シャムは迫り来るメイドさんのおでこに
腕を伸ばし手で動きを止める

メイドさん

「ああ〜シャムさま（泣）」

シャム

「ペル……」

仕事中はメイド長と言いなさいと
教えたはずだが…（汗）」

ペル

「てかなんでハグさせてくれないんですか」（ノ・：。）」

シャム

「いや、危険な感じがした（汗）
それより、あそこの2人は？」

ペル

「あつ！！」

シャムさまあのご主人さまが
オムライスを注文したんですが……………

長々となった状況を説明をした

ペル

「早く言々と私の奪い合いです！！」

勇者

「……いや違っつてッ（汗）」
ウィザード

「……………」

シヤム

「なる程な…」

じゃ、私は邪魔しちゃう悪いから店に戻るとしよう!!」

ペル

「そんなーY（＜―＞。）Y」

勇者

「いや、待てくれ!!」

シヤムを止める勇者

シヤム

「何か!？」

勇者

「い、いや

あのアンタ、その……（ノノノ）
思い描いてようなメイドだから!!
なんだ! その、う、美味しいのかオムライス!!」

シヤム

「味は悪くないと思いますが」

シャムの前では勇者の態度が明らかに違った

シャムの身なりは

しっかりアイロン掛けされた
メイド服で

膝が隠れる長い丈のスカート
袖口にはボタン止めのカフス

袖はしっかりスリーブになっていて
頭にはカチューシャ

エプロンは駄にフリフリしてなく
色もシンプルな白、ベース部分は紺

これぞオーソドックス！！

正に勇者の思い描いた好みのメイドだった！！

それに何と言っても

シャムがメイド服の魅力を
何倍も引き立たせている

切れ長で澄んだ瞳

髪は白銀でロング

背丈は170cmくらいあり
スタイルはモデル並み

アレ（ペル）とは違い

落ち着いた感じのメイドさんだ

勇者

「じゃー作ってくれ!!」

シャム

「では、店内で少しお待ちを」

すると勇者は大剣をペンダントに戻し
剣を納めた

そして、言われた通り店に戻る

ウィザードもその後につき

アレ（ペル）だけ置き去りにされる

ペル

「さつきからアレってなんですかあゝ!!
もおー8（<ロ>:;）8」

店の前で一人訳のわからん
ツッコミを入れるメイドさん

それを見かねたシャムが店の扉を開ける

シャム

「ペル!!遊んでないで手伝って」

ペル

「あ、はい

シヤムさま（o^ ^o）」

こうして今日も

安楽カフェ・メイド屋のメイド達は
ご主人さまをご奉仕するのだった。

つづく

第八話

あの2人が…

また、出逢ってしまった…

801道とBL道を極めようとする

あの2人が…

初めての出会いから

1ヶ月近くたっていたにも関わらず

2人ともお互いに相手の顔を覚えていた

女は言う

女

「ホモ猫さん!!」

男は返す

ペペ

「ホモじゃねーッ!!」

その後2人は少し見つめ合う

運命はまた、2人を巡り会わせた

第四話で2人の話が見れます

初めてあの本屋で出会って以来女は
この男を忘れられずにいた

男と言っても三丁目では
男はみんな獣の姿

でも女には
そんなちっぽけな事は
どうでもいい事だった

男の方は彼女とは
別な思いを抱いていた

出来るなら

もう、彼女に会いたくない

何故なら…

女の言葉が痛い程、胸に突き刺さる

ホモ猫さん

笑顔で呼ばれる度
耳を手で塞ぎたくなる

女は夢の中まで現れるように為った

「ホモ猫さん」

「ホモじゃねー!!」

「ホモ猫さん」

「ホモじゃねー」

「ホモ猫さん!!ホモ猫さん!!
どうしてあなたはホモなの？」

「ロミオとジュリエットばく言っな!!」

男はうなされ

布団から飛び出す毎日

日に日に男は

女が存在が怖くなっていった

そんな男の恐怖の象徴が

今、自分の目の前に立っている…

ペペ

「お、おなご！！」

女

「ホモ猫さん」

女を見上げる男

女は気を利かせ

男の目線に合わせる為
その場にしゃがむ

ペペ

「また、会ったニヤリね…（汗）」

女

「はい」

満面の笑みを浮かべ
返答する女

男は恐怖からか
尻尾がぴーんと立つ

ペペ

「じゃ、漏れはこれで!!」

後ろに振り返り

その場を後にしようとする男

女

「待ってホモ猫さん!!」

ぴーんと立った尻尾を

両手で握り男を引き止める女

ペペ

「ああッ……」

強張った顔で振り返る男

女

「待ってホモ猫さん……」

私……ホモ猫さんに渡したい物が……」

男は走った!!

走った……走った……

だが尻尾を掴まれているせいで
足が地面を空回りしている

ぺぺ

「うああああー離せニヤリいゝ（叫び）」

女

「あ、すみませんホモ猫さん!!」

慌ててその手を放す女

ぺぺ

「うニヤああー」

急に手を放しても
前に前進しようとする
勢いに歯止めが効く訳もなく

男は地面に倒れ顔を打つ

ぺぺ

「うげエ…ッ」

そして一回転して、また顔を打つ

ぺぺ

「うぼウ…ッ」

二回顔を地面に打ちつけ

ようやくその勢いを止めた

ペペ

「うう…」

体を起こそうとする男

女

「ホモ猫さん前にッ!!」

何か言いかけた女

女の方に目をやる男

だが、その時!!

正面から

向かって来る一台の自転車が

男はそれに

まだ気が付いてない

自転車に乗った男が慌てて

車体を横にしブレーキを掛ける

反射的に目を背ける女

ペペ

「あっ!?!」

自転車の車輪にはじき飛ばされた
男の体は大きく放物線を描き
そのまま道路に叩き付けられ
鈍い音を立て地面に落ち着く

女

「ホモ猫さん（泣）」

休む事なく次の惨事が男を襲う

ペペ

「ああ……」

意識が朦朧としているにも関わらず
男はボロボロの体を
気力だけで起こそうとする

そこに巨大なダンプカーが
地面を揺らしながら迫って来る

女

「ホモ猫さんッ！！」

そんな女の声も

ダンプカーの走る騒音にかき消され

女は手に持っていた

自分の鞆を宙に放り投げると

無我夢中で男の元に走って行く

地面に落ちた鞆の口から
あの日互いに手に取り合った
BL本が顔を覗かせていた

ダンプカーが通り過ぎる

倒れたままの男

女は男の元に駆け寄ると
全身の力が抜けたように膝を崩し
安らかな顔で眠る男の頬を
優しく手で触れる

女

「ホモ猫さん……」

ホモ猫さんッ！！　ホモ猫さんってば！！

いやだよ……そんなの……

ホモ猫さん……」

女の瞳から大粒の涙が
止め処なく溢れる

男の額を温かい
ものが濡らす

この平和だけが取り得の
三丁目で今猫神さん家のぺぺが
その生涯を終えた

と思ったその時

男の尻尾がピクツと動いた

ゆっくり瞼を開く男
ぼやけた視界が開けると
涙でぐしょぐしょになった顔の女が
男を迎えてくれた

ぺぺ

「なんで泣いてるの……」

女

「ホモ猫さん！！（涙）」

ぺぺ

「ホモじゃねーし……」

小さな獣の姿が幸と為したのか
その体のお陰で
ダンプカーに引かれずに済んだ
男の体は車体の下を潜り抜け
ただ単に気を失っただけだった

女

「また、会えましたね♪」

ぺぺ

「ああ……」

女の膝の上から見える青空
男の脳裏にあの言葉が浮かんだ

青天の霹靂……

心から男の身を心配し
涙まで流した女

男は聞いた

ぺぺ

「漏まえ……」

女

「はい、なんですか」

ペペ

「名前は…」

女

「やおい…」

『若葉やおい』って言うの…

ホモ猫さんは、やおいって言うて（／／／）「

ペペ

「ああ……（汗）」

若葉 やおい

これが、女の名前だ…

……

つづく

第九話

ここは三丁目のとある高校

生徒は女の住人ばかりで
あのお下劣も通う

そんなこの高校に
新しい担任の先生がやって来た

二年o r z組みに

やおい

「はぁーっ」

溜め息をつくやおい
それを見た親友が声を掛ける

みほ

「どうしたの若葉ちゃん？
溜め息なんてついて」

やおい

「みほちゃん……」

私ね…あの人の事考えると
胸がきゅんとするの…」

みほ

「あの人って

いつも若葉ちゃんが話すホモの人？」

やおい

「うん……」

いつも元気いっぱい

笑顔満開のやおいが

今日は妙にしおらしい雰囲気

みほ

「やおいちゃん……」

こんな姿のやおいを見るのは初めてで

みほは戸惑いなが言葉を選ぶが

掛ける言葉がなかった

やおいの肩に軽く手をぽんと置き

みほ

「後でゆっくり話聞くね」

やおい

「みほちゃん……」

ありがとね」

憂鬱な乙女心なんて

お構いなしに鐘の音が響く

三分くらい経ち

ようやく一人の生徒が沈黙を打ち破った
声を荒げながら

生徒

「遅いッ!!」

担任は何やってんのよ!!」

みほ

「そう言えば今日から新しい担任の先生来るらしいよ」

生徒

「はっ?いつもの担任は?」

みほ

「どこ行っちゃったんだろ?」

生徒

「なんて無責任なの…」

昨日何も言っていなかったのに…」

ガラガラッ!!

教室の扉が勢い良く開く

だが…

誰も入って来ない

生徒

「なに？」

ぴたッ　ぴたッ　ぴたッ

教室を歩く音

足音がおさまると次は

????

「今日からこのクラスを受け持つ事になった」

教卓の方から声がした
だが、誰の姿も見えない

やおい

「はッ!!」

生徒

「一体なによ…」（汗）

生徒

「声がするよ…」

みほ

「幽霊？」

教卓の方から聞こえる声で

ぼけーっとしてた

やおいの意識が

一瞬で現実の世界に戻された

声が止まった次の瞬間

教卓の後ろから何か白い物が

勢い良く飛び上がった

小さくて白い毛並みの

あれは…

猫神さん家のぺぺだ！！

飛び上がった白い毛並みの猫は

チョークを片手で取り

片足で黒板を蹴り更に飛び上がると

チョークを黒板に叩き付ける様に走らせ

そして黒板を蹴り宙をスピンすると

教卓の上に着地した

突然のぺぺの登場に

思わず席を立ち上がるやおい

やおい

「ホモ猫さん……」

ぺぺ

「ホモじゃねー!!」(怒)「

また、運命が2人を引き合わせた

そのまま時間が止まったみたいに
見つめ合うぺぺとやおい

ぺぺ

「何故漏まえが…」(汗)「

やおい

「それはこっちの台詞ですよ……」

生徒

「なんか水を差すようで悪いんですが…
前の担任は？それとあなたは？」

ぺぺ

「君たちの先生は……」

まあそれは置いて」

生徒

「置くなッ!!」

全くその通りです…

ペペ

「漏れは今日から君たちの教室を受け持つ事になった

『猫神 ペペ』だ!!」

生徒

「猫の姿ってことは…

先生は男の住人なんですよね?

創立100年以上を誇る

歴史と伝統に彩られた

この汚れなき由緒正しき女子高の門を…

何故…男が…」

ペペ

「まあそれは」

かくかくしかじかかくかくしかじかかくかくしかじか
かくかくしかじかかくかくしかじか……と言う訳だ!!」

生徒

「わかるかぁーーーーッ!!」(怒)」

やおい

「なるほど!!」

わかつたんか!!

生徒

「約100年もの間

男が踏み込んだ事のない神聖なこの場所に……

なんで、あんたみたいな野獣が来たのよ!!」(叫び)

指を差し、ペペに向かって

声を荒げる生徒

やおい

「あやちゃん落ち着いて!!」(汗)

また、喋りすぎで酸欠になっちゃうよ

それにホモ猫さんは野獣じゃないよ…

ホモ猫さんはホモなんだよ!!」

ペペ

「ホモじゃねー」(怒)

あや

「ほ、ホモッ!!」

ホモッたら野獣が野獣を喰らうあれよね…」(汗)

やおい

「あやちゃん(汗)

男の人」野獣ってこじつけは良くないよ!!」

あや

「じゃーなにッ!!」

けだもの
「獣とでも言うっ!？」

やおい

「それじゃゝ実質変わってないよ!！」

ペペ

「漏れはホモでも獣でもないニヤリがね…(汗)」

???

「朝からうつせーよ!！」

大体そんな小さな毛玉に何ができたよ!！」

んっ!？てかこの生徒は

第七話で登場した勇者さん!！」

ああ…高校生だったんだ…(汗)

話の腰を折ったその生徒は

斜め後ろの窓際に居た

制服の袖をまくった

腕をだらーっとぶらつかせ

腰掛けてる椅子を斜めにし

席に脚を乗せバランスを取りながら

だらけた格好をしていた

ペペ

「毛玉…(汗)」

勇者

「てか静かに寝かせてくれ……」

あや

「あんたね!!」

男を知らないからそんな事言えんのよ!! (叫び)

そんな無防備だと後で泣く羽目になるわよ!! (怒)

私は認めないから、こんな野獣がクラスの担任なんて!!

大体このクラス居るだけでも耐えられないんだから……」

あんた一体何があつたんだ…

やおい

「あやちゃん…」

もうゆうちゃん寝てるよ!!」

あや

「あ…… (汗)

先生!!生徒が寝てます!!

先生ならちゃんと先生らしいとこ見せて下さい!!」

認めないんじゃ… (汗)

ぺぺ

「いや…その前に出席取るうか…… (汗)」

二年orz組一時間目見送り…

U
U
U
U

第十話

もしも…

あの二匹が

無人島に流されたら

ペペと猫太の無人島生活

漏れらは新境地を目指し
ひたすらスワンボートをこいでいた

青い空を何度雲が流れて行ったのだろう
見渡す限り果てなく広がる青い世界
ふたりぼっちのスワンボートを
漏れらは、こいだ…

ただ我武者羅にこいだ
足が棒になり

ようやく猫太が、そのからっからに干上がった

喉奥から声を荒げた

「つて、どこですかここはーッ!!」

そんな藪から棒な一言が

漏れの笑いのツボを押した

「つぶ、ぷはははは…（笑）」

猫太

「なに笑ってんですか…」

ペペ

「いや、なんか可笑しくてな（笑）」

ひたすらこいだスワンを波に浮かべ
漏れらは少し休んだ

新境地を目指していて思ったが…

三丁目自体が新境地なのに

なんでまた、そんな場所を探してんだ漏まえは？

なんも探してませんよ別に

ただ……

最後の夏に先輩と何かしたかっただけですよ…

そうだったのか…

でも久しぶりだな…

子供みたいになんかに没頭したのは……

揺りカゴのように揺れるスワン

心地いい潮風

漏れと猫太は

知らぬうちに夢の中に…

そして目を覚ました時には

この無人島に流れ着いたのだ

ずぶ濡れの体、横たわる猫太

無残に折れたスワンの首

そして残骸が波打ち際に打ち上げられていた……

【猫神さん家の無人島生活】

漏れと猫太は

食べ物を探しに樹林へと足を伸ばした

生い茂る草花を掻き分けて行くと

次第に天を覆い尽くす程の樹林の群れに囲まれた

もう一ヶ月も経つのに誰も助けに来ない

島を横切る船も飛行機も渡り鳥さへも

その姿を見せることはなかった…

猫太

「お茶碗に盛ったほかほかご飯が食いたい
白米なんて一ヶ月見てない…」

ペペ

「ラーメンどんぶりを頭に被った
ヒロインなんて見たことない…（汗）」

猫太

「たしかに見たことないですね…（汗）」

ペペ「腹減り〜（涙）」

猫太「泣いてないで食べられる物探して下さいよ!!」

ペペ「こんなジャングルで何食べって言うニヤリか!!」

そう漏れが文句を垂れると

猫太は横たわる大木に近づく

コケだかカビだか生やした大木の下に

生えていたキノコを指差し

猫太「先輩!!このキノコ食べれますよ!!」

ペペ「漏まえは漏れにそこら辺に生えてた意味不なキノコ食べって
か？」

猫太「生きるか死ぬかって時に何言ってますか!!」

食べないなら僕が食べますよ!!」

ペペ「ふう〜今日の所は漏まえに付き合つか仕方ない…」

猫太「なんか腹が立ちます!!」

その日は

食べられるキノコを

何本か持ち帰った

夜になり…

ペペ

「きのこの数えかたってなんニヤリかね？」

猫太

「椎茸は一枚とか

えのきは一束だったかな？

種類によって異なるとは思いますが…

どうしたんですかいきなり？」

ペペ

「じゃ…

なめこは一ぬめりってことか？」

猫太

「絶対違うと思います それ…（汗）」

ペペ

「じゃ〜バナナの皮は？」

猫太

「一枚とかじゃ？」

ペペ

「漏まえ…」

その回答は滑っているニヤリよ……」

猫太

「はい？（イラッ）」

ペペ

「無人島生活のせいで
面白いことも

言えなくなってしまったか…

かわいそうゲっ！！

………うう………」

猫太の投げたヤシの実が

ペペの顔面にえげつなく食い込んだ

猫太

「とつとと寝てください！！」

ペペ

「ツツコミは一皮以上剥けてるニヤリがね……（ボタンきゅー）」

昼間の穏やかさとは打って変わって

島の夜は深い静けさで満たされる

漏れたちは代わりばんこ

互い違いに番をする

火を絶やさぬように

折れ木を火の中に投げ込む猫太

ペペ「なあゝ漏れもう葉っぱで寝るのやだ!!」

猫太「そんな事言つたて…」

葉っぱくらいしか寒さを防げる物がありませんよ…」

ペペ「ふかふかのベッドの中で

悶々としてる自分を解放できるって

幸せなことなんだな……」

猫太「死んでください!!（即答）」

その一言を聞き

漏れは体を起こす

ペペ「もう漏まえ1ヶ月もこんな訳の分からん島に閉じ込められて生活してんだ!!」

AVもない、エロ本もない、アダルトサイトも見れないし、おなごも居ない!!」

無い無い無ゝゝい!!」

無人島生活で雄猫二匹のムサイ生活のせいで

ウミガメの産卵で興奮するくらい病んでんだよ!!」

狂ったように溜まるは!!」

猫太「不潔……」

ペペ「ふ、ふ不潔！！（汗）
じゃゝ漏まえは溜まんないのか！？」

猫太「はい！！（キツパリ）」

ペペ「溜まんない訳あるかぁー！！」

猫太「いいえ！！」

ペペ「あゝあん（汗）」

猫太「？」

ペペ「じゃゝなんだ漏まえは！！

一体何を溜めて生きているのかね！！

フラストレーションは何処にー（泣）

三丁目はいつから

こんな腑抜けが暮らす町に為ったんだー

男なんだからー

いいのよ女の子のこと考えて

温もりを思い出しても

あーんなこと、こーんなこと想像しても

自分の秘めたる頭の中の

出来事なんだから名誉毀損も著作権もないわけよー！！

これオカズにしましょ（笑）

あいつもオカズにしましょ（涎）

頭の中で欲望を蠢かしてればいいのだよ！！

それを内面で大切に育てていれば…

いつかその一つ一つが

血となり肉となり属性になるうーーーー（涙）」

猫太「…先輩（汗）」

キモいを通り越して……気持ちが悪い！！」

ペペ「アボーンツ！！」

わかってたさ…そんなの…

百歩譲って私がキモいと言うことにしよう…

譲らなくてもキモいです！！

なんで君は

そんなまっすぐな瞳で僕を見る…

男ならわかってくれるだろ

一ヶ月、一ヶ月も僕は我慢したんだ…

そう言っても君には理解しがたいだろうから

。。。をタバコに置き換えよう

置き換えんの無理があるんじゃない…

ヘビースモーカーなら

いっぶくして10分もしないうちに

タバコに手が行ってる

じゃーなんだ10分経たないうちにアソコに手が…

そう漏れは一ヶ月もいっぶくしてない

ヘビースモーカーと同じなんだよ猫太くん!!

目の前にタバコがあるのに
吸えない苦しさが君には理解できないのか? (叫び)

..... (決まった)

猫太

「じゃー禁煙成功ですね!!」

ペペ

「え..... (汗)」

猫太

「大体そんな無駄なことに力入れるなら...
少しは島から抜け出す
方法を考えてくださいよ..... まったく...」

ペペ

「無駄じゃない!!」

猫太

「大体そんなことしたいと思わないし...
一体なにが楽しんです?」

なんだ...

なんでこんなに...

汚れを知らない

まっすぐな瞳で漏れを見ているんだ

うがぁ~~~~~

まま眩しい…

目が眩む…

漏れ凄い汚れ…

この人本当に天使なんじゃ…

そうだからと彼は

はるばる汚れの無い天国から

漏れ達汚れた

3丁目の住人を助けにきた…

天使なんだ!!

あはは…

ペペ「汚い漏れを…」

そんな目で見るとはじゃない…」

猫太「？」

ペペ「糞漏れなんて童貞オークションに賭けてやる！！
三丁目の変態たちと漏れまを餌に

インサイダー取引だ！！海外流失だ！！

明日にでもその透き通った瞳の輝きを消してやる！！」

猫太「なんか無人島生活のせいで壊れてきましたね…」

ペペ「糞ムラムラするがなあ」

あつ

こんな所にキノコ

ヘタをとって

キノコの傘を胸に着けて

.....

猫太「……………」

ペペ「おおおおっばい」(照れ)

猫太「いい加減…そこに転がってるヤシの実で殴りますよ(汗)」

ペペ「ムラムラするがなあ」

猫太「……はあー(ため息)」

ペペ「あっ!?!?!」

ペペが落ちていた貝殻に耳をあてる

ペペ「おなこの喘ぎ声ばいのが聴こえる」(涎)

うおゝありがたやゝありがたやゝ」

これをオカズに…むふッ(ノノノ)」

猫太「ッ対外にしろオおおおおッ!」

猫太の右ストレートが

ペペの顔面を捉え

ペペはトラックにでも引かれたかの様にぶっ飛び
砂場に落ち砂を巻き上げながら転がって
ようやく止まった

捻る様に打ち込んだ猫太の拳から煙が立ち昇る

でもペペは、すぐその場から起き上がる
そして…

ペペ「星が沢山見えるニヤリ」

猫太「こんなおなごの居ない無人島でも
夜空がきれいニヤリよ」

殴られた衝撃で回りに星が輝いているようです

猫太「もう朝日が出てますよ……」

つづく

第十一話

ぺぺ

「今日は心機一転

席替えをしようと思います!！」

やおい

「はいっ先生!！」

勢い良く腕を上げるやおい

ぺぺ

「はい…やおいさん(汗)」

やおい

「じゃー私ホモ猫さんの隣りがいいです」

ぺぺ

「いや…(汗)

漏れは先生だから、君の隣りはムリかな……」

やおい

「ムリなんて事は存在しませんよ!!

ホモ猫さんはもっと頭を柔らかくするべきです!!

お肉は酢で煮ると柔らかくなるみたいなんで…

ホモ猫さんも酢で煮て柔らかくなれば今の困難が開けるはずですよ」

ぺぺ

「ああ…(汗)

色々ツツコミを入れないと

いけないとは思うが……パスト……

だが柔らかくしたとこで

君の隣りにはどう足掻いてもムリなんじゃ……」

やおい

「いいですかホモ猫さん」

こんなふうに円を描くように席を並べれば大丈夫です」

ペペ

「なる程……

これなら漏れが生徒を一望出来る……」

やおい

「それにこんなふうに

手も握れますよ」

なぜかペペの隣の席を

陣取っているやおい

ペペの手を取り

ぎゅっと握るやおい

ペペ

「や、やおいさん……！

これはマズいだろう……」

潤んだ瞳でやおいはペペに顔を近づけ

やおい

「いや…
ですか……」

ペペ
「いや……（汗）」

あや
「ハーストップっ!!」

いつものごとく
塚山が二人を止めに入る

ペペ
「ホッ……（一息）」

やおい
「なんで止めるのあやちゃん……」

あや
「そんなイチャイチャは放課後に回しなさいよ!!」（怒）
あんたたち見たいのを
KYって言うのよ!! たくッ……（怒）」

やおい
「KY!?!?…
結構妬けちゃう……」

ええ〜（驚き）
あやちゃんホモ猫さんのことそんなふうに思ってたの……」

あや

「違う違うッ！！（怒）」

ペペ

「確かに…」

違うなやおいくん！

多分こうだ…

結局のどこヤンデレって？じゃないか…」

やおい

「なるほど」

あや

「……………（イラッ）」

ペペ

「ヤンデレってのは……」

【三丁目のヤンデレラ】

キンコーンカーコン♪

キンコーンカーコンー♪

ペペ

「では出席取りますよー！！」

はい、やおいくん！！

……………ん？

なんだ珍しいですね、休みですか…
じゃ、「先生!!」

んっ? どうしました塚山さん!?

あや

「もう……誰も返事しませんよ……」

ペペ

「居眠りですか、まったく(怒)」

と、突然前に座っていた

一人の生徒が椅子から崩れるように倒れた

ペペ

「そんなに熟睡してるんかい!!
てか起きなさい!! (怒)」

あや

「無駄ですよ……」

ペペ

「え…?」

私はようやく周りの異常さに気が付いた

席に着いたまま

ぐったりしてる何人もの生徒

静か過ぎる教室

引き裂かれたカーテン
その窓から見えるのは
木に吊るされた何人もの生徒たち

血みどろの床

一人立ったままの塚山

教室の扉が遠く感じた

何か生暖かいモノが頬を濡らす
私は恐る恐る天井を見上げた

ぺぺ

「あア……」

目の前の出来事に言葉を失くした

やおいが天井に磔にされている

彼女の胸元から滴る血が

私の額を濡らした

あや

「若葉の胸を一思いに刺したの……」

ペペ

「なんでそんなことを……」

あや

「先生に優しくされてる若葉が……許せなかった…

あの子、無邪気で無駄に元気なだけが取り柄で

恋とかにも無頓着で、いつも私を頼ってくれて

友達って言うよりは、面倒の掛かる妹って感じていた……

でも、先生が来てから若葉が邪魔になったの……

いつも、いつも先生の後追う若葉

先生の話をする若葉

先生に色目を使う若葉

そんなあの子見てたら、なんかある感情が
沸々と沸きあがってきたの

だから私……」

片手に握られた真っ赤に染まったナイフを
ぎらつかせ迫り寄る女

ペペ

「く、くるな……」

あや

「先生……」

これでやっと……2人つきりよ……」

【ペペの妄想…終】

ペペ

「こんな感じかな？」

やおい

「なんで私がヤンデレじゃないんですか！！（怒）」

あや

「若葉、あんたね怒るところ違う…（汗）」

てか、なんで私なのよ

このアホ教師！！（怒）

これじゃ、ヤンデレ通り越してただの病みよ！！

それにKYってのわねー

空気読めって言うてんのよー！！（バンッ！！）」

立ち上がって机に両手を叩き付けた

やおい

「空気を読めってことか♪

やだなーあやちゃん空気読んでる♪×2」

それでかい…（汗）」

あや

「あつそ…（汗）」

ペペ

「ただの病みか……」

そりゃー漏れの勉強不足だ…

今日は実習にします、じゃー!!」

教卓から降り教室を抜けようとする
そんなペペの首の後ろをヒョイと持ち上げる塚山

あや

「HRで実習!？」

数少ない担任の持ち場なんだから
しつかりやって下さいね♪(怒)」

ペペ

「はい…(汗)」

教卓へと戻されるペペ

【仕切り直して…】

ペペ

「席替えの続きですが……」

この席の並びは共学じゃ、絶対有り得ない!!」

共学じゃなくても有りえねっの…

やおい

「なんでですか？」

隣の席の子と手を取り合える距離

こうして一人一人が手を取り合って輪になれば

誰もが誰かと繋がっているんです♪

それってなんかとっても大事なことで…

時には隣の子に答えを教えて貰ったり!!」

それっていわゆる、カンニングじゃ…(汗)

ぺぺ

「おい…(汗)」

やおい

「時には早弁してる

隣の子のオカズを分けて貰ったり!!」

ぺぺ

「注意しろよ…(汗)」

やおい

「こんなふうに助け合えるんです」

ぺぺ

「だが、やおいくん…

この席の並びでは

黒板が見えない席があるではないかー!!(叫び)

やおい

「あ、私見えない…」

ぺぺ

「それにだ、今は女子校だからいいが…

もしこれが共学なら男子生徒は大問題だ!!(怒)

この席の並びでは珍ポジを直せない…(絶望)

。。。ポジションか…

でも有り得ない話ではないですね…

万が一女装した男子生徒が紛れ込んでいたらどうするんですか？

三丁目の男性はみんな獣の姿だから心配無用です！！

みなさん騙されてはいけませんよ…

もしかするとこの中に男子生徒が潜んでいるかもしれません…（汗）

何故なら最近の美男子は女装も得意なんですから！！（汗）

やおい

「私は違います！！」

ホモ猫さんの前で証明します…」

突然制服を脱ぎだそうとするやおい

あや

「はいっストッププッ！！（大声）」

今まさに

制服に両手を掛け

めくり上げ脱ごうとするやおい

呆気にとられ身動き出来ないアホ教師

それをいとも簡単に止める塚山

【仕切り直して…】

ペペ

「では、オーソドックスな並びにしましょう！！」

やおい

「私前の席がいいです」

ペペ

「わかりましたから…（汗）」

あや

「こんなくだらない事に時間掛けすぎよ！！（怒）」

ペペ

「まーそう言わないで下さい…」

席と言うのは学園ものなら大切な事なんです！！

どの立ち位置かで

その役柄も決まってくるんです！！

例えば、主人公の隣はヒロイン席が妥当です！！

この場合主人公の後ろ側に付くか前側に付くかで

また違ってきます！！

後ろ側なら、ここは分かりやすくツンデレタイプにしときましょうか

顔合わせれば何かと口喧嘩する主人公とヒロイン

そんなツンデレ彼女も授業中は主人公の背中をボーッと見つめて

そんな設定が好ましいでしょう！！

そしてヒロインが主人公の前側なら

顔合わせれば何かと口喧嘩する主人公とヒロイン

でも授業中は彼女の背中をボーッと見ている主人公

良くあるパターンですが

この違いが何か分かりますか？

ただ見つめているだけじゃない…

授業中ふとした瞬間に

気になる相手の背中が目に付く

そして想うだろう……

素直に為りたい、守ってやりたい…

色々あるでしょう…

相手を見ている時間が多いと言う事は

相手の事考えちゃう時間も多いと言う訳です

ましてや主人公とヒロインですから

と言う事は、そう恋が加速するんです！！（泣）

背中の中の位置を取るか取られるかで

話の展開が全く別物になるんですよ！！

だから席はとっても大切な事なんです！！（熱血）

あや

「話が長いッ！！（怒）」

やおい

「じゃーこのクラスはみんな主人公で

みんなヒロインなんですネ」

ペペ

「何イツ！！（ガーン）」

オール主人公、オールヒロインだと！！（衝撃）」

あや

「早いとこ決めて下さい…（イラ）」

ぺぺ

「わかりましたよ…」

漏れは考えた鐘が鳴るまでの12分

6	☐	☐	☐	☐	☐
5	☐	☐	☐	☐	☐
4	☐	☐	☐	☐	☐
3	☐	☐	☐	☐	☐
2	☐	☐	☐	☐	☐
1	☐	☐	☐	☐	☐
	一	二	三	四	五

4一か3一やおいが妥当か…

それ以外だと駄々をこねるな…

漏れの中では、6六ヒロイン席と

決まっているのだが…

あそこは、勇の席か…

口も悪いし態度もでかい

ついでに毎日居眠り全くヒロインとは言えないな（汗）

塚山はうるさいから

1五にするか！！

んッ？

これは……

4ーやおい

6五勇

1五塚山

魔のトライアングルじゃないか……！！（絶望）

【2年orz組魔のトライアングル…終】

つづく

第十二話

ペペ

「おばちゃんリゾット一つ!」

学食のおばちゃん

「そんな物はないよ!!」

カレーかカレーうどんにしときな!!」

また、カレーか……

今日食べるとしたら4日目になる…

大体カレーは三日目までが我慢できる範囲なんだおばちゃん!!

流石に4日目は、もういい加減見たくない

だからと言ってカレーうどんにはしたくない

麺をすすする時に自分の白い毛に汁が着くかもしれないからな……

とは言つたものの

他のメニューは…

ランチセット

ライス、サバ味噌、たくあん二切れ、味噌汁

日替わりライスセットは

今日は

ライス、サバ焼き、たくあん二切れ、味噌汁

どちらも350円心優しい価格だ…

そして丼物は

親子丼、カツ丼、豚丼、牛丼

共に450円味噌汁とお新香付き

麺類

ラーメン

塩、醤油、味噌、とんこつ

焼きそば、うどん、そば、あんかけそば
450円

売り上げの半分を占める

カレー450円

バリエーションもある

カレーラーメン、カレーうどん、カレーそば
450円

各種、大盛は50円追加…

全てワンコインでお釣りがくるのだ
学食万歳って訳なのだ…

だが、悩む…悩むぞ…

漏れは優柔不断なのかもしれない…

学食のおばちゃん

「ほら、後ろ詰まってるだろ!!
迷うくらいならカレーにしな!!」

ぺぺ

「あぁッ……………（汗）」

漏れがメニューを迷ってるうちに
後ろが酷い並んでる…（汗）

まるで大陸を移動するヌーの群れとはいきすぎだが
凄い列で食堂の入り口が見えない……………（汗）

渋々、カレーにした
テーブルに着いて10分も経つのに
一向に食事が進まない…

カレーと言えば世のお子様たちでも
10分あれば事足りるであろう…

だが、今の漏れには……………
スプーンの上に乗せたカレーを
口に運ぶのでさえ容易な事ではない……………（絶望）

四日目のカレー……………

やおい

「どうしたんですか、ホモ猫さん？」

ぺぺ

「いつの間に…（汗）」

やおい

「ずーっと、いましたよ」

ぺぺ

「そうだったの……」

カレーのせいで気が付かなかった…（汗）」

やおい

「食欲ないんですか？」

心配そうな顔で漏れを見るやおいくん

ぺぺ

「いや……その場の流れで

また、カレーを頼んでしまったんだ

四日もカレーで食が進まないんだよ……（暗黒）」

やおい

「じゃー一日目の気分で食べれば大丈夫ですよ」

拍子抜けする程明るい笑顔で

彼女はそう言ったのだ…

ペペ

「成る程な…その手があつたか!!」

四日目のカレーを四日目と思わず…

一日目の気持ちで食べる、あれか……（汗）」

やおい

「そうです、ホモ猫さん♪

野球の試合でピッチャーが

一球一球、初球の気分で投げる

一試合マウンドを下りず投げ続けるために使う奥の手!!」

そんな奥の手ありません!!

ペペ

「そうか…あれか……

何度も読み返したはずのエロ本を

買った時の気分で読むあれか!!

通称、貧乏抜き……（汗）」

そんなの初めて聞きましたよ…

やおい

「交際が長いせいかわ昔のラブラブがなくなってしまった

恋人との刺激のない生活……

でも付き合った当時の気分に戻って

また、ドキドキで刺激たっぷりの毎日を取り戻したり♪

歳を積み重ねた人でも

若い時の気分になって毎日を送れば

元気に生活できたり♪

気持ち一つ変えるだけで

「なんとかなることもあるんです」

ぺぺ

「今までのことを一旦リセットして
初心に振り返る……」

「こんな大切なことを忘れていたとは……」

やおい

「ホモ猫さんがんばって!!」

ぺぺ

「ああ……」

瞳を閉じて漏れは

カレーが食べたかった四日前に戻ろうと
必死で心の中でカレーが食べたいと
何度も自分に言い聞かせた……

だが……

ぺぺ

「ダメだ……」

「最早体がカレーを欲しがないのだ……」

やおい

「じゃ、仕方ないですね、はい。」

やおいくんが弁当のたまご焼きを箸で掴み
漏れのカレーの上に載せてくれた

ぺぺ

「ありがとう……」

やおい

「甘味ですよ」

漏れはカレーの上にちよんつと載った
たまご焼きを食べた

ぺぺ

「う、うまい……」

無駄に味付けの濃い学食のカレーより
それは断然美味かった……

口に入れた瞬間

甘みが広がると同時に少し焦げた苦味が
でもそれが手作り感をだしていて美味かった

やおいくんのたまご焼きを作ってる姿が見える

やおい

「ホモ猫さん？」

ぺぺ

「ああ……すまん!!」

あまりの美味しさに行き過ぎたよ……（汗）

どうせ妄想してたんでしょ……

やおい

「さあーがんばって食べてくださいー!!」

ぺぺ

「やおいくん…」

その前に、なぜ君は学食に入るんだね（汗）

やおい

「わたし、ホモ猫さん見ながら食べると食欲が進みます」

眩むくらいの満面の笑みを浮かべ

彼女はそう言うのだ

ぺぺ

「てかオカズか!!」

漏れはスプーンを置いた

ぺぺ

「今日は残します…」

どうも間食出来そうにありません…（暗黒）

やおい

「ダメですそんなの!!」

突然席を立ち漏れに向かって言った
彼女の表情から笑顔が消えていた

大きな声で周りが注目する
外野がザワザワし始める

ぺぺ

「やおいくん落ち着くんだ!! (汗)」

やおい

「ホモ猫さんはカレーを残しちゃダメなの……」

ぺぺ

「やおいくん声のトーンもう少し下げて!!」

やおい

「カレーを残すホモ猫さんなんて……
ホモ猫さんじゃありません…… (涙)」

顔を伏せながら学食を飛び出すやおいくん

漏れはカレーを両手で担ぎ上げると
慌ててやおいくんの後を追いつける

食堂のおばちゃん

「食いつわつたら皿返すんだよ!! (大声)」

ぺぺ

「待つんだやおいくん!!」

走るやおいくんに向かって漏れは叫んだ
だが、その声を払い除けるように走る

廊下で塚山くんと野々村くんにすれ違うが
やおいくんは、そのまま突っ切る

あや

「若葉!!」

みほ

「またはじまったね…（汗）」

漏れも遅れて、その後を追う

ペペ

「待つんだやおいくん!!（叫び）」

みほ

「あっ先生!!」

あや

「どうせまたいつもの…」

自分の理想が壊されたとかなんとかでしょ…（汗）」

みほ

「でもそれで若葉ちゃん…」

一度屋上から飛び降りようとしたよね（汗）」

あや

「あつたわね…そんなこと……（困り）」

みほ

「大丈夫かな先生…」

走り去る二人を心配そうに
立ち尽くす塚山と野々村

廊下を突っ切るとやおいくんは
屋上へ向かう階段を駆け上がって行く

必死で彼女の後を追う

大体なんでカレー担ぎながら
必死こいて汗掻いて全力疾走で階段駆け上がって
貴重な昼休みを削ってまで
彼女を追い掛ける必要があつたんだろうか…

階段を制覇し扉を開けると

澄み切った青空の下

フェンスを背に立つてるやおいくんが視界に飛び込む

ペペ

「待つんだやおいくん！！（汗）」

やおい

「来ないで下さい…」

ぺぺ

「漏れがカレー間食出来ないくらいで

飛び降りることはないだろやおいくん!!」(汗)

やおい

「ダメなんです…」

ホモ猫さんがカレー間食できないと

私…こうするしかないの……」

ぺぺ

「なんでだ…」

理由を聞かせてくれないか?(汗)

やおい

「私…」

カレーしか作れないから…」

ぺぺ

「はあ?(汗)」

やおい

「ホモ猫さんと一緒に暮らしても

カレーしか作ってあげられないの…」

でも、ホモ猫さんは…

四日目のカレーも食べれないから…」

もう……死ぬしかないの!!」

ちよつと待て

今の話を整理するとだな

一緒に暮らすは決定事項なんだな…

ペペ

「待てさっきたまご焼きくれただろ!!」

やおい

「あれはあやちゃんが作ってくれてるの…」

ペペ

「あの委員長キャラがね…（汗）」

いやだがな、やおいくん!!

カレーを作れると言う事はだな

にくじやがもシチューも作れるぞ!!」

やおい

「私昔から料理すると

回りが戦場のようになっちゃうの

トマトピューレが血のように飛び散ったり

オーブンが爆発したり

鍋から殺人ガスだしたり

私の料理で人一人亡くなってます!!」

ペペ

「マジか…（汗）」

やおい

「そんな私でも一つだけまともに作れるのがカレーなんです…」

でも、ホモ猫さんは四日目のカレーが食べれないそれって、私たちの関係も

四日しか持たないってことだから…

ホモ猫さんに捨てられたら

私生きていけない…（涙）」

ぺぺ

「ああ…（汗滝）」

漏れと住んで一生カレー

食わす気だったんだ…この子…（暗黒）

ぺぺ

「あのな、やおいくん…」

料理が出来なくても最近はレトルトや出来合いとか沢山あるじゃないか…！」

やおい

「私そう言う手抜き許せないんです…最終電車で帰す男の手抜きとか

キスに舌入れない手抜きとか…大っ嫌い…！」

ぺぺ

「それ手抜きか…（汗）」

てかおなごがそのような事を言っでは駄目だよ…（困り）

やおいくん…聞いてくれ……」

やおい

「なに……」

ぺぺ

「万が一、いや百歩譲って漏れたたちが一緒に暮らすとしたらな…」

相手の出来ないことを力バーするのもパートナーの役目だと思うんだ……」

君がカレーしか作れないのなら漏れがカレー以外の物を作ればいいだろ!？」

やおい

「ホモ猫さん……（／＼／＼）」

漏れの言葉にやおいくんの表情が和らぐ

ぺぺ

「じゃ、こっちに来てくれないか？」

やおい

「あの…ホモ猫さん……私高所恐怖症で動けないんです。」

ぺぺ

「明るい顔で言うことじゃ…（汗）」

ベタな展開を迎えてしまったと思いつつも
両手に担いでたカレーを下に置き

この状況を何とかする為に
漏れはフェンスを爪を使いよじ登った
そして慎重にやおいくんの元へ下りる

ぺぺ

「やおいくん手を掴むんだ!!」

やおい

「ホモ猫さん…」

やおいくんが漏れを見つめ…
ゆっくり手を取った

ぺぺ

「一緒に登るぞ!!」

やおい

「はい…」

だが、その時突風が吹き荒れる

ぺぺ

「うがあああああ………（汗）」

そのまま地面まで真つ逆さまに落ちる体を
ひねって漏れは両足で地面に着地した
手足が地面に少し埋れたものの
落ちた場所が花壇で、その為軟らかい地層だった

そのお陰もあってどうやら助かったようだ

ぺぺ

「猫で良かった…（汗）」

やおい

「ホモ猫さん……………!!」

真上から声がする

漏れは慌てて上を見上げる

ぺぺ

「やおいく…」

ズゴ……………ンッ!……!!

花壇に咲いていた

ひまわりの花びらが舞い上がった

黄色い花びらがゆっくり落ちる

漏れの上に覆い被さるように

やおいくんが落ちてきた

ぺぺ

「やおいくん…?」

やおい

「案外死なないもんですね……」

ペペ

「いや、多分しんだよ漏れ……」

やおい

「あつたかいから……大丈夫ですよ……」

ペペ

「重いからどいてくれ……（汗）」

やおい

「いや……もう少し……」

チャイムの音が聴こえる昼過ぎだった……

つづく

第十三話

何故…

保健室のベットって

こんなにも寝心地がいいのだろうか……

漏れは知らぬ間に、深い眠りに落ちてしまった。

ペペ

「うう……」

眠りから覚めると辺りはもう薄暗く

漏れは深い静けさの中に居た

ゆらゆら揺れるカーテン

窓からは月明かりが、ぼんやり零れていた

ベットから下りカーテンを開け

時計を見上げると、針が21時を回っていた

ペペ

「こんな時間まで寝てたとは…（汗）

早いとこ帰らなければ……」

保健室から廊下に出ると

普段は何も感じない学校の廊下

だが昼間とは違い、夜は別の顔を覗かせていた

物音ひとつしない静けさと暗闇の中

漏れは自分の荷物を取りに職員室へと向かった

ペペ

「ん？」

職員室付近まで行くと

漏れは一瞬その足を止めた

真っ暗な職員室のドアの前を

誰かが立っていた

暗がりでは相手の姿が窺えない

漏れは恐る恐るその人に声を掛けた

ペペ

「だ、誰ニヤリか！？　こんな夜に！！（汗）」

????

「誰？」

ゆっくり此方に向かって歩いてくる謎の人影
その足音が自分の目の前で止まる

ペペ

「えッ？」

漏れは相手の姿を見て止まってしまった

暗がりの中からやおいくんが姿を現したからだ

やおい

「ホモ猫さん」

ぺぺ

「なぜ…居るこんな夜中に？（汗）」

やおい

「まだ、荷物が置いてあったから…」

あとこれ、はい」

やおいくんが漏れに日誌を差し出した

ぺぺ

「わざわざ…」

これを渡す為に今まで待ってたのか…（汗）」

やおい

「はい」

ホモ猫さんと交換日誌楽しいから

ここで待っていました…」

顔を伏せ、しおらしげな

顔をするやおいくん

交換日誌って…

交換日記みたいに言うなよ…（汗）

ぺぺ

「てか、やおいくん!」

やおい

「なんですか？」

ペペ

「今気が付いたが…

日誌とは日直が書く習わしではないか…

何故毎日君が、日直でもないのに日誌を書いているのだ！？（汗）」

やおい

「日直から日誌を買ってるんです

120円で毎日…」

ペペ

「…………（汗）」

んなアホな…

漏れと日誌のやり取りがしたいが為に

毎日120円も使ってたのか…

それなのに漏れは

癖のある柔らかい文字で

長々と綴るやおいくんの文を

いつも漏れは一行でコメントしてた……

最低だ……

やおい

「ホモ猫さん？」

ぺぺ

「やおいくん……」

もう夜も遅いので送って行きましょう……」

やおい

「はい」

本当は何故120円で日誌の順番を
買うのか聞きたかったが…

なんとなくその言葉を避け

漏れは、やおいくんを
寮まで送る事にした…

【三丁目のぺぺ】

校舎から外に出ると

半欠けの月が漏れらを出迎えてくれた
冷たい風が頬を撫でと

体がブルツと震え尻尾がピーンと立つ

やおい

「トイレですか？」

ぺぺ

「いや…（汗）」

寒かったただけだ……」

やおい

「じゃー

これ、どうぞ……」

やおいくんがしゃがみ

漏れの首に

自分のマフラーを巻いてくれた

ぺぺ

「すまない……（汗）」

やおいくんの暮らす寮は

徒歩20分程の場所にある

横並びで歩きながら帰り道を進んだ

漏れとやおいくんが横並びで歩いていると
なんだか……

ペットと飼い主見たいだな……

そんな事を考えながら漏れは
隣りのやおいくんを見上げた

すると、目線に気が付いたやおいくんが
漏れに向かい笑顔を送ってくれた

漏れは目をそらし見なかった事にした

歩き始めて少しして

やおいくんの足が止まった

ペペ

「どうかしたか？」

やおい

「あれ？」

立ち止まったまま

真上を見上げるやおいくん

漏れも彼女の視線の先に目をやる

ペペ

「えッ…（汗）」

漏れは自分の目を疑った

目線の先にあったモノはふわふわ浮かぶ円盤

ついに遭遇した……

Unidentified Flying Object (未確認飛行物体)

略してUFO 俗に言う空飛ぶ円盤

それが漏れたたちの真上を漂う

回っているコマが回転を弱め

ぐらぐら安定しない、あの感じで漂う

なんだかイメージより、小さいし飛び方頼りない

ペペ

「なんじゃこりゃ…（汗）」

やおい

「ホモ猫さん…これって、アレ？」

ペペ

「あゝアレだろ…」

真上を漂う円盤に目線と言葉を奪われ
2人して、その場所に立ち尽くした

三分くらいして、円盤の動きに変化が現れたした

ゆらゆら回る円盤の回転が

徐々に激しく、その速度を増し始める

ぐらつきながらゆっくり回る円盤も

回転のスピードが上がるにつれ円盤が安定し

そして回転がトップスピードに達した円盤は

そのまま、飛び出した

ジグザグな起動を描き

余りにも変則的なその動きで

夜の空を飛行する

ぺ
ぺ

「な、なんだ…？（汗）」

やおい

「ホモ猫さん！！早くっ」

円盤を追い掛け

やおいくんは走り出した

ぺ
ぺ

「ま、待つんだっやおいくん！！（叫び）」

遅れて漏れも走り出す

脳裏に浮かぶ彼女の身の危険

【ぺぺの妄想】

突然円盤の中心部分から淡いピンク色の光が若葉を照らす

やおい

「きゃーッ！！」

若葉の体が宙に浮かび

光の中に吸い込まれて行く

ペペ

「やおいくん!! (汗)」

やおい

「ホモ猫さん!! (涙)」

そして彼女は円盤へと消えた

目が覚めると

固いマットの上で両手足を拘束具で縛られ

謎の異星人が二匹、若葉を見ていた

やおい

「何…これ……」

余りに凄い未知との遭遇で

若葉は声を無くした

異星人の又メった触手が若葉の頬を濡らす

若葉は恐怖で

身動き一つ取る事も

声を出す事も出来ずにいた

唯一彼女がした事は

瞼を閉じ両手を握り

歯を食いしばって、耐える事だけ

触手が制服を裂き

若葉の体を食べる様に這わせる触手…

【妄想終了…】

ペペ

「いかん、いかんいかん!!（焦り）」

その妄想がいかな（笑）

マズい…

やおいくんの身に何かあつてからでは…

取り返しのつかない事態になる前に彼女を止めなければ……

ペペ

「やおいく〜ん止まるんだ〜!!（叫び）」

やおい

「ホモ猫さ〜ん早く〜」

無邪気に呼ぶやおいくん

漏れの呼び止める声など全く聞いてない

ペペ

「やおいくん!!」

その好奇心が危険を招く前に引き返すんだーッ!!（叫び）」

万が一の状況が頭をよぎる

【ペペの妄想…PART2】

やおい

「ホモ猫さん……」

いつになく真剣な表情の若葉

ペペ

「な、なんだねやおいくん…（汗）」

やおい

「あの……」

ペペ

「……ん？」

やおい

「私ね…」

出来たみたい……」

恐る恐る聞いてみた

ペペ

「なにが？（汗滝）」

やおい

「赤ちゃん……」

なんと言つ事だ…

あの円盤野郎に孕ませられたなんて…
好きでもない異星人の子供なんて…

今時、どこの世界にそんな話があんじゃあー（泣き）

【妄想終了…】

ペペ

「待つんだやおいくくん！！（泣き）」

やおいくんの足が早くて
距離が離されていく

頭によぎるイメージが濃くなつてく
そして、焦る自分

円盤を追い掛ける女子高生

女子高生をがむしゃらに追い掛ける猫

ペペ

「やおいくくん！！

そんなに円盤を追い掛けたいなら

明日ダイソーでフリスビー買ってあげるから
こっちに戻りなさいーッ！！（叫び）」

やおい

「いやです♪

私を止めたかったら捕まえて〜!!」

ペペ

「何を訳のわからん事を〜!! (叫び)」

やおい

「早く〜」

四本脚で走っているはずなのに
全くやおいくんに追い付かない

それにやおいくんは
息切れ一つしてない

足を止めず地面を蹴り続ける
喉はとづくにカラカラで

足は地面を蹴り過ぎて感覚がない
体が悲鳴をあげているが

この身に鞭打ち
気力だけで、彼女を追う

一、教師として

彼女を守らなければならない…

使命、責任、信頼

この背にあのクラスを

背負ってるのと同じなんだ

漏れのクラスの生徒は

漏れを守るッ！！

だが、そんな決意ひとつで

やおいくんの脚に追い付けるはずもなく

徐々にその姿が闇に消えていく

しかも、漏れは石ころに足を取られ
その場に倒れてしまった…

ペペ

「やおい…くん……」

すぐさま、その身を起こし走り出す

彼女の姿は見えないが
空に円盤の光が見えた

漏れは、それを目指し走った

満身創痍で走る

まるで、走れメロスだな…

逃げるセリヌンティウスを追いかけるメロスだな…
そんな物語じゃねーだろ……

円盤を見失わない様に
必死で目で追い、猫の様に走る！！
いや…猫だからアンタ！！

走った、走った走った走った…

だが、円盤は空へと消えた

真っ暗な空に半月
周囲は物音一つしない寝静まった家々
電灯が消えては点き、消えては点き

漏れはその場に立ち尽くした

ペペ

「やおいくん……」

「何してるんですか？」

聞き覚えのある声

ペペ

「やおいくん…」

振り返ると、そこにはやおいくんの姿

やおい

「見失っちゃいましたね…」

ペペ

「いや、見失ってない…」

やおい

「え？」

ペペ

「まあーいいから帰ろう
いい加減……」

やおい

「はい」

見失ってはいなかった
漏れの未知は…

目の前なあるのだから……

う
う
く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6337c/>

三丁目のペペ

2010年10月30日10時16分発行